太　　玄

太　玄　会

太　玄（会報73号）　目　次

一、あいさつ
笠原聖雲会長……1
西村東軒理事長……2
金丸鬼山事務局長……3
二、平成28年度総会
資料掲載……4
総会記……13
総会・懇親会風景……14
三、第58回太玄会書展
日程表……15
役員及び各部部長……15
入賞・入選者……16
会場・審査風景……19
特別講演……20
作品解説・席上揮毫……21
授賞式・祝賀会……22
謝辞（長谷川渓華）……24
四、太玄会所属団体のこの一年の活動（平成28年3月～平成28年11月）……25
五、太玄会所属団体の活動予定……32
六、追悼
浅見錦龍先生……33
佐渡壽峰先生……40
七、特集
菴澤幸楓……46
新井清玉……47
石井玉翠……47
大窪昇鶴……49
堀越壽嵓……50
編集後記　広報部

近ごろ思うこと

会　長　笠原聖雲

伝統ある太玄会の会長を承ってから三年が経ちます。鴨長明は方丈記の冒頭で『ゆく河の流れは絶えずしてしかも元の水に非ず』と申していますが、太玄会の歩みもまたしかり。同じことを前例に倣って繰り返すことは、停滞や後退をすることは有っても前進は望めません。客観的な総括と速やかな対応により、少しずつ変わっていくことがベストではないかと思うことが常でしたが、幸い優秀なスタッフに恵まれ、着実に変わりつつあるように思います。

第58回太玄会書展においての変更点は次のとおりでした。

準会員以上の方々には出来るだけ大きな作品に挑戦して欲しいと願い、その代わりとして準会員の部の受賞者を増やすことに致しました。反対に、会員以上の方の受賞には少し厳しく臨むことになりましたが、これには二つの自覚を促す願いが有りました。一つは腰を据えて古典と向かい合う中から深みのある作品を書いて欲しいということ。もう一つは、正式な会員になった以上、「会があなたに何をしてくれるか」を期待するのではなくて、「あなたが会に何を寄与出来るのか」を願っているからであります。

次世代育成のために、学生選抜展を併催しましたことは、特筆すべき出来事でした。家族連れの多数の入場者を得て、展覧会全体が活気づいたように思います。

太玄には十五本の矢が有ります。次年度以降も、英知を出し合って一歩ずつ前に進めたらいいなあと思う昨今です。

第五十八回太玄会書展を終えて

理事長　西村東軒

五十八回展を無事終了することができて正直ほっとしています。毎年のことではありますが、展覧会運営は太玄会の定期総会後から始まります。事務局の編成から始まり、そして事務局会議、運営委員の協議を通じて展覧会運営の在り方、或いは将来への課題などテーマは多岐にわたり議論されます。会議では積極的且つ忌憚のない意見が交わされた後纏められ太玄の理事会に提出、承認を得て実施となります。

第五十八回展全体の印象を申し上げますと全体に作品制作に対する自覚が芽生えてきたように感じ嬉しく思いました。一月二十日には太玄会書展恒例の講演会を行いました。日展会員である有岡郊崖先生のお話は今の太玄会に所属する会員が書作するうえで最も必要な内容であったと感じました。『教養主義・表現主義・生命感』といった柱が示され書の歴史や古典をしっかり勉強しそのうえで新たな表現を模索、そして何より作品は生命感がなくてはならないということです。作品を書く上での心構えを改めて確認いたしました。会員一丸となって切磋琢磨しましょう。

太玄では新企画として本会の参加団体より小・中・高校生から優秀な作品を選抜、展示を行いましたが、保護者の方々を含め多くの観覧者がありました。次回展では更にスペースの点や選抜出品数等につき拡充をしていく方向で検討に入ります。

五十九回展に向け従来の解説会・席上揮毫そして学生による席上揮毫におきましても工夫を加え更に楽しく参加できるイベントに成長させることが大切であり達成に向け努力いたします。

また、二年後には第六十回記念の太玄会書展となりますので会員一同、一致団結して太玄会を盛り上げていきたいと思いますのでご協力のほどをお願い申し上げます。

平成二十八年度事業を終えて

事務局長　金丸鬼山

平成二十八年度の事業計画に基づき、適時会議が開かれ第五十八回太玄会書展に向け討議されました。第一回の運営委員会、理事会から年度の懸案事項が話し合われ、先ず初めに退会者の復帰に関する議案が全員一致で承認され、第二に書展についての企画等が討議され、学生展の併催、特別講演会の開催、会員賞並びに準会員、公募の審査と授賞率の見直し、第三に太玄会の運営に関る問題として会費の改定、又広く会の運営を理解してもらう為に委員不在の社中代表を合同委員会への出席、等々を総会での承認が確認されました。

これら多くの課題を一つ一つ運営委員会、検討委員、部長合同会議で検討を重ね第五十八回展に向け事務局一丸となり、この一年業務を遂行して来ました。その結果特記すべき事項として特別講演会は日展会員の有岡郯崖先生「書のモダニズム」と題した貴重な話に会場を埋め尽くした受講者は熱心に聴講していました。

又、講演終了後西村東軒理事長の厚意による有岡先生著作の貴重な本を抽選で受講者に贈呈され大いに盛り上がりました。

尚、五十八回展より併催した第一回学生選抜展により来場者数が前回展に比べ、集客数が大いに増加した事は大変喜ばしい状況でした。更に例年の企画ではあるが、副理事長担当による作品解説と席上揮毫の新しい試みとして、中高生とのコラボを実施し太玄会の将来を担うであろう若者の揮毫に見学者を魅了しました。

この様に役員並びに事務局、会員の協力により第五十八回太玄書展は無事終了する事が出来ました。しかし、第五十九回、六十回記念展に向けての準備が始まります。太玄会は十五団体の協力が有って成立します。今後一層のご協力をお願いし、今年度の報告と致します。

平成28年度　総会

日　時　平成28年4月17日(日)　16時開始
会　場　上野精養軒
（司会・伊場英白）

次　第

一．定足数の確認　（伊場英白）出席111名　（委任状570名）
一．開会の辞　（蕗野雅宣）
一．常任顧問挨拶　（田中鳳柳）
一．会長挨拶　（笠原翠雲）
一．議長選出　（田中鳳柳）
一．書記任命　（三根揚煇・山村鳳羽）
一．議　事
　(1)　平成27年度　事業報告　（金丸鬼山）
　(2)　平成27年度　決算報告、会計監査報告　（下谷蘓雪・高橋心行）
　(3)　平成28年度　事業計画案について　（金丸鬼山）
　(4)　平成28年度　予算案について　（下谷蘓雪）
　(5)　新役員の紹介（理事・実行委員　理事）（伊場英白）
　(6)　その他
一．書記退任
一．議長退任
一．閉会の辞　（宮負丁香）

平成27年度　事業報告書

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会　場
27.4.19	運営委員会・理事会 平成27年定期総会 懇親会	事業報告・会計決算報告 事業計画案・予算案審議 役員承認・その他	上野精養軒
5.11	太玄会役員選抜書展 〈過去・現在・未来へ〉 〈併催　歴代役員物故展〉	搬入・陳列 第57回太玄会書展関係・ 当番審査員について	セントラルミュージアム銀座
5.12	運営委員会（内覧会） 総出品数　111点 （50回展　364点）	その他 初日	
5.16 5.17	入場者数　749名	田宮文平先生による講演会 最終日・作品撤去	
5.13	検討委員会 事務局部長合同会議	第57回太玄会書展関係 その他	上野精養軒
7.15	運営委員会	第57回太玄会書展関係 その他	上野精養軒
10.14	検討委員会 事務局部長合同会議	第57回太玄会書展関係	上野精養軒
12.6	第57回太玄会書展運営委員会 理事会	書類搬入 第57回太玄会書展関係 忘年懇親会	上野精養軒
28.1.13 1.14 1.15 1.20 ～1.24	第57回太玄会書展 1／20～1／24 9：30～17：30 総出品数　982点 （56回展　994点）	搬入 審査（会員賞選考） 審査 河野隆先生による特別講演会 席上揮毫・解説会	東京都美術館
1.24	第57回太玄会書展	授賞式・祝賀会	上野精養軒
4.6	会計監査		
4.17	運営委員会 運営委員会・理事会 平成28年度定期総会	事業報告・決算報告 事業計画案・予算案審議 その他 懇親会	上野精養軒

第57回 太玄会書展出品状況

☆総出品点数　982点

名誉顧問 常任顧問 董事 運営委員	19
理事総務 監事	6
理事 実行委員	63
理事	111
審査会員	158
会員	109
準会員	227
公募	289

第57回 太玄会書展入賞状況

太玄大賞	4
太玄賞	5
全日本書道連盟賞	5
特別賞	5
奨励賞	23
会員新人賞	16
推選	19
準推選	37
特選	30
準特選	74
入選	185

※入場者数　4，233名

事務局各部活動状況報告

◎事務局

（担当　副事務局長 伊東玲翠　江原見山　伊場英白　小出聖州）

27・4　定期総会実施

役員選抜展会場当番総括

5　役員選抜展（過去・現在・未来へ）及 田宮先生に依る講演会実施　於 セントラルミュージアム銀座

6　平成27年度会員名簿発行

7　第57回太玄会書展実施に向けての打ち合わせ

10　運営委員会、理事会、忘年懇親会への通知

11　牧野商会、美風会への第57回太玄会書展の依頼

12　本展会場打合せ　当番総括　総会会場打ち合わせ

28・1　第57回太玄会書展開催　河野隆先生に依る講演会実施

2　平成28年度定期総会のお知らせ

※年間に開催される運営委員会、理事会、部長会、総会等会議の連絡事務

※報道関係（本展作品）（年鑑、広告）掲載に関する業務

※住所変更、退会届等 受付処理業務

※東京都美術館平成29年度公募団体展展示室貸出しに関する申請業務一式（平成27年4月～平成28年3月）（平成29年4月～平成34年3月）の5年間

太玄会32会期　1月19日～1月26日（内定）

◎会計部（担当　下谷蘇雪）

27・4　平成26年度の会計監査に向けて仕訳帳等の整理準備

総会に向けて平成26年度の決算書、並びに平成27年度の予算案作成

平成26年度会計監査実施

平成27年度総会　決算書、予算案報告、総会受付補助

太玄会役員選抜書展　予算案作成、運営委員会に提示、会期中の必要経費の準備

各社中へ平成27年度会費納入に関する書類並びに依頼書を送付

5　太玄会役員選抜書展開催　会期中の必要経費支払業務実施
6　平成27年度納入会費の整理入力、領収書作成依頼
7　会費領収書を各社中へ送付
10　第57回太玄会書展に関して各部の行動予定の把握
行動費、経費の算出、資金の準備
第57回太玄会書展書類搬入時の準備
12　第57回太玄会書展の予算案作成、運営委員会に提示
平成27年度理事会忘年会　会費納入受付　公募出品料集計確認
第57回太玄会書展必要経費準備
28・1　第57回太玄会書展審査会に於ける手当及び経費支払業務
第57回太玄会書展授賞式、授賞懇親会の諸経費準備、支払業務
2　第57回太玄会書展の収支報告書作成
3　平成27年度会計監査に向けて元帳、仕訳帳の入力整理
平成27年度決算書、平成28年度予算案作成
平成28年度総会準備

◎事　業　部（担当　蕗野祐涯）

27・5　アオキに会員名札を発注（5／18）
6　事務局長へ第56回太玄会書展のポスター・ハガキ・招待券を送る（6／13）
㈱風雅プランニングとの打ち合わせ
第57回太玄会書展出品票印字に関して
出品規定をA4サイズに変更など（6／25）
7　㈱風雅プランニングとの打ち合わせ
ポスター・ハガキなど全書類に関して（7／28）
8　校正（ポスター・ハガキ・出品規定等）（8／9）
伊藤慈恩・小泉興起両先生へ部長印を発送（8／19）
真仙会・九龍社・鳥跡会三社中の会員名札、及び役職札、事務用品の確認と整理（8／27）
9　㈱風雅プランニングと最終打ち合わせ（9／4）
出品規定・出品票を各社中準会員以上へ個人宛に発送（9／13）
㈱風雅プランニングから各社中・各業者へポスターなど書類発送（9／14）
11　杉本先生に賞状を郵送（11／16）
28.1　東京都美術館に備品搬入、各社中の役職札の手配（1／13）
備品の整理（1／14）
賞札の手配（1／15）
年間を通じて封筒は各先生の依頼により郵送

◎広　報　部（担当　荒井湧山）

27・4　定期総会
5　太玄会役員選抜書展　会場風景写真撮影　於：セントラルミュージアム銀座
9　原稿依頼
部長会にて会報第72号の構成計画を報告　於：上野精養軒
27・9～　会報第72号の編集
28・3　（役員・第56・57回展の入賞・入選者リスト、役員展出品者、総会議案書、事業報告 等）
原稿依頼
笠原聖雲会長、西村東軒理事長、

金丸鬼山事務局長
（特集）嶋田白染、柘植金鵄、山本白鷗
各団体事務局担当
27・12　理事会・忘年会　於：上野精養軒
28・1　第57回太玄会書展（審査、会場風景、講演、授賞式、祝賀会）
写真撮影　於：東京都美術館

◎**渉外接待部**（担当　石井蕙園）
27・4　太玄会役員選抜書展　案内状宛名シールの作成
各店舗店頭に置く案内状発送
案内状各関係団体へ発送
11　第57回太玄会書展　祝賀会招待状の文面確認、㈱風雅プランニングへ印刷依頼
12　住所シール作成案内状発送、祝賀会招待状の発送
28・1　祝賀会最終確認後、席次表の作成、席次表・席札の設置を精養軒へ依頼
祝賀会来賓者の受付

◎**役員展部**（担当　小泉興起）
27・4　太玄会役員選抜書展「過去・現在・未来へ」
併催：歴代役員物故展の陳列、撤去作業を依頼―牧野商会
5　11日(月)　陳列
12日(火)～17日(日)　会期
16日(土)　講演会　田宮文平先生
※会場及び受付の設営管理総括
17日(日)　終了後撤去・搬出
その他　(1)歴代役員物故展における作品借用への礼状及び作品集の謹呈
(2)会期終了後借用作品の返却手配、並びに確認

◎**図録部**（担当　伊藤慈恩）
28・1　作品撮影　457点　㈱風雅プランニング
（審査会員以上357、会員受賞者44、準会員受賞者56）
編集　㈱風雅プランニング
2　一回目、二回目の校正
発行部数と発送先の確認
図録発行
各社中事務担当者宛発送　㈱風雅プランニング（2／29）

◎**搬入出部**（担当　稗田影風）
27・10　書類搬入案内書を社中事務担当者に発送
（会計部より受領の払込取扱票同封）
招集通知書を搬出入部員に発送
（書類搬入日・作品搬入日の事務作業の説明書）
12　書類搬入日　事務の実施
書類搬入の受付
社中持参の出品目録等の書類集約
社中別出品者数表の全体表作成
出品者数を理事会にて報告
引き継ぎ事項

・審査事務部長に出品者名簿
・会計部長に当日納入の出品料
・事務局長に出品者名簿・資格別作品出品数一覧表
・陳列部長に出品者名簿・作品型式調査票・資格別作品出品数一覧表
・その他、担当者に配布

28・1　作品搬入日　事務の実施
作品搬入の受付
搬入数の確認・確定（表装店9社より持ち込み）
役職別・社中別数の確認（社中別出品者数表参照）
資格別作品出品数一覧表・出品目録・社中別出品者数表の確定
事務局長に報告後、審査事務部長に引き継ぐ
作品搬出日　立会い実施
作品搬出の受付
搬出数の確認・立会い（表装店9社の引き取り）

◎審査事務部　（担当　飛田冲曠）

27・12　・第57回太玄会書展の書類搬入確認（12／6）
・審査事務部処理について打ち合わせ

28・1　・第57回太玄会書展審査事務部打ち合わせ、役割分担説明（1／13）
・審査手順、作品配置について打ち合わせ
・作品、982点確認　・審査場作成
・作品配置　・成績処理の打ち合わせ
・出品者目録校正
・審査方法打ち合わせ、役割分担確認（1／14）
・㈱風雅プランニングと打ち合わせ
・会員賞選考委員による審査
会員新人賞の選考審査
特別賞、奨励賞の選考審査
太玄賞、全日本書道連盟賞の選考審査
太玄大賞の選考審査
・入賞者代表謝辞選出
・選考委員集合写真撮影
・選考委員及び当番審査員による審査（1／5）
推選、準推選、特選、準特選、入選の選考審査
・選考委員及び当番審査員集合写真撮影
・作品管理、成績名簿作成　・褒賞部へ連絡

◎陳　列　部　（担当　大場大幹）

27・10　各社中に陳列人員名簿の依頼書類を送付

12　搬出入部より社中別出品者名簿と準会員、公募の名札を受け取り確認
牧野商会へ出品点数の連絡、見積り依頼
陳列原案の作成
副部長、委員へ書類送付

28・1　搬入日　牧野商会担当者と打ち合わせ　準会員、公募作品と名札の確認
陳列日　総人数約60名、15時半終了
初　日　9時より副部長と名札、賞状等の再確認

最終日　14時半終了、名札等の取り外しと整理

◎褒　賞　部（担当　小泉興起）

27・12　精養軒担当者との打ち合わせ（12／6）
副部長との打ち合わせ（12／6）
委員への日程表を配付（12／6）
リボン・事務用品の確認と補充
松下徽章へ賞品のメダル発注
野口商店へ賞状入れの筒発注
額（太玄大賞分）購入
事業部へ賞状の発送依頼（揮毫者宛）

28・1　審査終了後、各社中へ受賞代表者申告用紙の配布、その後集約（1／15）
呼名簿の依頼（1／15）
代表者名簿の作成
賞状の揮毫と確認
精養軒に式次第を依頼
会場案内図・席次表作成
賞状・賞品等を各社中へ発送（1／23）
会場設営（1／23）
授賞式運営（1／24）

◎祝賀会部（担当　大河原由佳）

27・11　各社中の事務担当者へ依頼書送付（祝賀会出席者希望数・リボン送付先住所氏名）
振込用紙の送付（11／12）
※従来通り立食パーティー、当日受付ありで行う。

12　精養軒と打ち合わせ（12／18）
委員へ書類送付（12／27）

27・12　当日までの準備
～　・出席人数把握　・会費納入確認　・次第の確認

28・1　・書類作成　・看板（舞台上の確認）　・リボン確認
・案内表示作成（揮毫スタンド用社中名表示、テーブル拡大表示、当日来賓受付表示、控室案内表示）
各社中へ出席者数リボンを指定先に送付（1／13）
精養軒と最終打ち合わせ（1／20）
※人数・テーブル数、進行等

祝賀会（1／24）

15時00分～	部長・副部長・委員集合、打ち合わせ
15時30分～	仕事準備
16時00分～	当日受付開始
17時50分～	会員入場
18時00分～	来賓入場、祝賀会開会
19時30分～	祝賀会閉会
	来賓退場
	会員退場

出席者数	
申込み	252名
来賓	37名
当日申込み	27名
合計	316名

平成28年度　事業計画表

年月日	会議・事業等	会議・事業内容等	会場
28・4・17	運営委員会 運営委員会・理事会 平成28年度定期総会	総会関係・第58回太玄会書展 当番審査員決定方法・日程 その他の確認 事業報告・会計決算報告 事業計画・予算案審議・その他 懇親会	上野精養軒
5・11	検討委員会 事務局部長合同会議 運営委員会	第58回太玄会書展関係 その他	上野精養軒
7・13	運営委員会	第58回太玄会書展関係 その他	上野精養軒
10・5	検討委員会 事務局部長合同会議	第58回太玄会書展関係 その他	上野精養軒
12・4	運営委員会 理事会	書類搬入 第58回太玄会書展関係 忘年懇親会	上野精養軒
29・1・13 1・14 1／20～1／24 9：30～17：30 1・15 1・18 1・19 1・22 1・24	第58回太玄会書展	搬入 陳列 授賞式・祝賀会 最終日	東京都美術館 上野精養軒 東京都美術館
4月上旬	会計監査		
4・16	運営委員会・理事会 平成29年度定期総会	懇親会	上野精養軒

平成28年度　役員構成

名誉顧問	梅原　清山	
常任顧問	福田　丞洲	田中　鳳柳
会長	笠原　聖雲	
副会長	垣内　楊石	石川　流芳
董事	春藤　大耿	
理事長	西村　東軒	
副理事長	蕗野　雅宣	小原　天簫
事務局長	金丸　鬼山	
副事務局長	伊東　玲翠	江原　見山
	小出　聖州	
運営委員	笠原　聖雲	垣内　楊石
	西村　東軒	蕗野　雅宣
	宮負　丁香	金丸　鬼山
	瀧沢　曲峰	伊東　玲翠
	伊場　英白	小出　聖州
理事・総務	石井　光華	石島　廻山
	木全　珠香	髙橋　江東
監事	高橋　心行	中田　珪川
理事実行委員	足達紫鳳	新井清玉
	石井香村	石井珠翠
	菴澤幸楓	植木蒼穹
	荒井湧山	石井蕙園
	伊藤紫香	伊藤慈恩
	海野十方	大岡蘭仙

理

事

大河原由佳　大木秘翠　大窪昇鶴　大場大幹
笠井津仙　風間松翠　片倉道子　鎌田龍祥
上嶋桂風　亀ヶ谷深翠　川端敏江　黒川白嶺
黒田桂泉　小池鱗華　小泉興起　小林紫雲
小林碧桃　佐々木恵陽　佐々木幸棄　佐藤龍聖
下谷蘓雪　嶋田白染　志村恵風　白崎芙楊
逸町恵風　滝澤聖華　田邊艸水　田村昇鶴
柘植金鵄　飛田冲曠　富久鳴泉　富山虎跑
鳥越新芽　中尾勝子　中元泰乗　並木金紫
南部碧章　西澤厚子　西谷香峰　橋本春溪
稗田影風　蕗野祐涯　吹原草扇　細谷芳月
堀越壽嵜　前川郷石　増田山酆　増永楊蘭
三上彩風　南　溪石　三根揚煇　村松鳳襟
森　久圃　山内浪華　山村鳳羽　山本白鷗

會田春燕　青木芳濤　赤堀高峯　浅香麗芳
池田紅華　池田静心　石黒自耕　石坂翔鳳
板垣芳蘭　板倉建昇　伊藤桐花　伊藤遙山
岩井壹龍　岩谷小丘　植村暁恵　馬居李帆
浦田楊月　大木暁峰　大櫛一峰　大竹伯燿
大畑晃翠　大森鳳城　岡崎翠晃　岡島順子
小野敏之　垣内玉華　勝又慶竹　加藤径石
嘉門瑤泉　川上白鳳　川谷淳子　川本景月

菊野白濤　久保田芳仙　倉田桂華　倉持栄秋
栗田伯陽　小泉香園　小堀蘚穂　小宮柳岱
小山泰雲　近藤寿泉　佐藤北峰　齋藤孤芳
櫻井玉苑　笹井芝雪　里中光陽　清水美代子
下島東僊　下村清子　末永照英　杉浦華英
杉本英華　鈴木恵理　須田瑞兆　清宮白鷺
関根暁香　瀬下綾影　髙橋興擧　髙橋心華
田上洋香　髙山爽快　宝田暁蓮　竹内游月
田中恵康　田中盛觀　田中柳惲　田村麦浪
段野裕子　坪川九翠　徳永みや子　中垣郁芳
中西甫子　中村藤香　中森茶月　西澤翠香
長谷川香濤　長谷川溪華　長谷川流祥　花澤雙鴻
林　幸恵　林　韶舞　林　鳳仙　原田彩翠
弘田長風　蕗野研涯　福田節子　藤岡悠苑
古谷善子　星野遙涯　細田耕仙　堀　桃泉
真岸京湖　松尾蘭月　松島恵風　松田爽花
御園生溪鳳　蓑　青松　宮嶋吾風　宮原真玄
宮本芳秀　三好凌香　村井藍瑛　山内紀隆
山口香葉　山崎寛齋　山崎琇園　山崎翠嵐
山崎洋子　山下玉水　山田春壽　山田騰沸
山本晧月　湯浅瑞雲　吉岡綏雲　吉田景雲
吉田恵子　米倉暁芳　渡部越愁　渡辺玲雲

第57回太玄会書展入賞による昇格者

理事へ10名

板倉　建昇　大竹　伯燿　小野　敏之　嘉門　瑤泉
川上　白鳳　川本　景月　佐藤　北峰　関根　暁香
瀬下　綾影　段野　裕子

審査会員へ18名

赤木　美那　石山　松香　内山　了亭　太田　翠華
影山　文奈　北嶋　蘆園　小山　君代　下原　春美
髙木　帝月　髙島　泉遙　龍口　紫苑　成澤　攝艶
西沢　薫風　廣田　蓬雲　松井　華雪　松山　翠苑
望月　俊邦　守田　蘚霞

会員へ17名

池田　芳翠　遠藤　昌運　大須賀竹仙　小俣　柏翠
加賀谷浪子　菊地　梨祥　小谷　香拓　小山　萌生
佐久間輝珠　佐藤　美佐　杉山　葉子　鈴木　竹園
関谷　白瑤　相馬　蘭香　畠山　静枝　原田　兆祥
横山　陵風

準会員へ28名

青木　爽游　浅田　広樹　印南　醉豊　上野　桂尚
右近　桜月　小澤　雲峰　方波見早子　岸　美津子
小山　千翔　坂　智大　佐々木玉峰　佐野　富雄
沢田　信桐　髙橋　弘雲　角田　輝響　中澤　桂琇
中村　丹裳　中元　玉蘭　中山　志峰　西村　果仙
藤田　晶洋　増井　紅翠　松井　芙蓉　宮川　彩波
宮澤　溪翠　宮本　祥太　森沢　蒲翠　守田　禎香

平成28年　事務局構成

事務局長　金丸　鬼山

副事務局長　伊東　玲翠　江原　見山
伊場　英白　小出　聖州

会計部　下谷　蘓雪

事業部　蕗野　祐涯

広報部　荒井　湧山

渉外接待部　石井　蕙園

図録部　伊藤　慈恩

搬出入部　稗田　影風

審査事務部　飛田　冲曠

陳列部　大場　大幹

褒賞部　小泉　興起

祝賀会部　大河原　由佳

総会記

広報部

総会の前日から天候が思わしくなく、当日は交通機関も乱れ開始直前に会場へ到着した遠方の会員も多い中、111名の参加をもって無事に開会することができた。

冒頭の田中鳳柳常任顧問の挨拶では、これからの太玄会をさらに盛り上げ、一流の団体にしていくためにも会員一人ひとりが自覚と熱意をもって取り組むことが重要であるとの言葉があった。そして本日の議事について、充分に審議していただき、意見を出し合い、今後の発展のため会員みんなで協力して実践していただきたいと語った。

続いて笠原聖雲会長からの挨拶では、昨年度の事業では「過去・現在・未来」をテーマに役員展を開催し、約50年間にわたる歴史を締めくくることとなったが、これまでの会員の協力に対し、感謝を述べられた。そして、話題は作品制作の方向性へと移った。書作品には、古典を学び作家の思想や体質が加わることで表現される作品、師匠の手本を忠実に表現する作品などがある。しかし、太玄会では前者の作品に取り組む作品をもっと増やした書集団にしていきたい。そのためには良いものを見て、しっかりした基本に基づいた制作をすることで相互に精進することが大切と考える。また、太玄会の希望として、書歴の多少に関わりなく多くの人が参加し、この会を盛り上げていただきたいと語った。

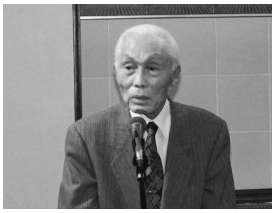
平成28年度　総会・懇親会風景

平成28年４月17日(日)　会場：上野精養軒

総会風景

西村東軒理事長

開会の辞　蕗野雅宣副理事長


田中鳳柳常任顧問

笠原聖雲会長

総会風景

司　会
伊場英白副事務局長

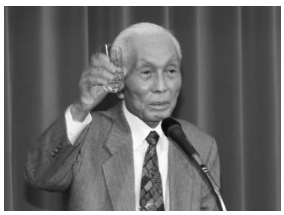
閉会の辞
宮負丁香事務局長

議事報告
金丸鬼山事務局長

総会風景

懇親会風景

懇親会風景


乾杯の発声
田中鳳柳常任顧問

開会の辞
垣内楊石副会長

懇親会風景

懇親会司会
小出聖州副事務局長

閉会の挨拶
石川流芳副会長

第58回　太玄会書展

日程表

年月	日	曜	作業内容	時間	会場	担当部
29 1	13	金	搬入	10:00〜12:00	都美搬入室	搬出入部
	14	土	会員賞選考	11:00〜	都美審査室	審査事務部
	15	日	鑑別・審査	〃	〃	〃
	16	月	予備日			
	17	火	予備日			
	18	水	陳列	11:00〜	都美展示室	陳列部
	19	木	開会	9:30〜17:30	〃	会場当番
	20	金		〃	〃	〃
	21	土		〃	〃	〃
	22	日	授賞式 祝賀会	16:30〜 18:00〜	精養軒 〃	渉外接待部 褒賞部 祝賀会部
	23	月	開会	9:30〜17:30	〃	会場当番
	24	火	最終日 作品撤去	9:30〜15:00	〃	陳列部
	25	水	搬出	10:00〜12:00	都美搬入室	搬出入部

役員及び各部部長

名誉顧問	梅原清山	理事・総務	石井光華
常任顧問	福田丞洲	理事・総務	石島廻山
常任顧問	田中鳳柳	理事・総務	遠藤有翠
会長	笠原聖雲	理事・総務	木全珠香
副会長	垣内楊石	理事・総務	髙橋江東
副会長	石川流芳	監事	高橋心行
董事	春藤大耿	監事	中田珪川
理事長	西村東軒		
副理事長	蕗野雅宣	会計部長	下谷蘓雪
副理事長	小原天簫	事業部長	蕗野祐涯
副理事長	宮負丁香	広報部長	荒井湧山
事務局長	金丸鬼山	渉外接待部長	石井蕙園
理事	鈴木暎華	図録部長	伊藤慈恩
理事	瀧沢曲峰	搬出入部長	稗田影風
副事務局長	伊東玲翠	審査事務部長	飛田冲曠
副事務局長	江原見山	陳列部長	大場大幹
副事務局長	伊場英白	褒賞部長	小泉興起
副事務局長	小出聖州	祝賀会部長	大河原由佳

第58回　太玄会書展入賞・入選者

理事の部

太玄大賞（五十音順）

石坂翔鳳（真仙）　近藤寿泉（菅菰）　長谷川溪華（書人）
長谷川香濤（書星）

審査会員の部

太玄賞（五十音順）

太田芳琴（真仙）　篠原翠雨（書人）　内藤秋麗（書星）
新田白楊（九龍）　三岡翠風（高友）

全日本書道連盟賞（五十音順）

遠藤鈴響（書星）　黒川虚白（九龍）　杉本雅峰（燎原）
林賢子（真仙）　横山恵華（研友）

会員の部

特別賞（五十音順）

天寺雅良（高友）　國松都佼（書星）　杭全松苑（真仙）
佐藤美苗（九龍）　山口杏園（菅菰）

奨励賞（五十音順）

石井煌醉（高友）　今田柳邨（燎原）　川島香竟（書星）
北村如雲（九龍）　二木眞木（真仙）
三浦利恵（書王）　山上玉僊（書人）

会員新人賞（五十音順）

遠藤昌運（書人）　菊地梨祥（菅菰）　佐久間輝珠（書星）
杉山葉子（書王）　鈴木竹園（書星）　相馬蘭香（燎原）
土本京月（九龍）　中澤澄心（真仙）　山田松陽（高友）

準会員の部

推選（五十音順）

石原成雅　牛澤智水　海老沢京香　大木操守
大熊蕙玉　尾崎清爽　小澤雲峰　垣内楊玄
加藤千鶴　菅野照子　京増瑞葩　小林幸子
小松崎紫流　佐々木華瑤　佐藤紫泉　佐藤小曄
髙田歩　田口汀水　田邊溪祥　時田大祥
中島和子　西村智範　芳賀光珠　長谷川栄芳
巻島清麗　増田紅艶　宮川彩波　宮本恵玉
安田瑞僊　山崎のり子　渡辺高峰

準推選（五十音順）

相木小百合　浅倉恵子　板垣仙露　市川秀苑
今泉寛宏　宇田川翠扇　榎本華艶　遠藤桃葉
大河原佳奈　釜田響　上西秀峰　木津純子
久保田健司　小島一風　小林侊香　小松秋香

古谷野星麗　櫻井碩翠　佐々木玉峰　沢田信桐
島村有醉　清水嶺花　下城蓼華　菅　祥真
菅谷弘麗　鈴木万深　鈴木美晁　鈴木文子
高嶋九華　竹内翠紗　土屋爽流　手島萬峰
内藤妙子　中元玉蘭　西岡山州　野村恵秀
平野幸子　藤平玉峯　細萱玲風　堀内柳覚
増井紅翠　松浦桃苑　松永愛泉　宮本祥太
宮本翠邦　村山霜紅　茂木朱櫻　守田禎香
家中麗醉　山形翠簫　山岸信彦　山田晞琇
山田香雪　油井謙輝　横田栄僊　渡辺春彩

公募の部

特　選（五十音順）

阿部弘信　石井起和　石川未来　井出清玉
伊藤聖夏　内田黄鳥　大熊　勇　大塚美代子
垣内仁美　草間清晨　熊谷桐慶　栗原紫翠
古賀輝煌　小暮兆琳　小林洋子　児山九聲
佐藤蒼艶　佐藤優衣　猿田浩子　菅沙矢香
鈴木光鶴　仙石良子　髙橋玉泉　遠山陽江
中山智加江　夏目紅恵　西方勇玹　西端　茂
二瓶花僊　蔵島召泉　平田光空　藤田寿仙
藤原博子　細渕金杏　堀井恕香　増田澄靖
松村祥風　矢野松翠　山内聡華　山田光艶
横溝早苗　米倉喜美代

準特選（五十音順）

荒原香堂　有坂義隆　飯島綾花　石井梅香
石川惺楓　井上紀秀　牛口仙桃　大野遥佳
大山紫彩　岡島寿石　岡本美佳　岡山旭洋
片山廣楓　勝畑喜市郎　加藤暉川　金井薫姚
狩生久美子　川井韶瑞　川谷淳一　神田絹香
熊谷　弘　栗本　暁　小出春扇　神山秋子
後藤紀子　小林富子　櫻井美津枝　櫻田明道
佐々木芳華　眞田星鳥　下間果穂　下間明燈
下原春樹　白神美織　鈴木麻美　鈴木光濟
鈴村早秀　高橋越雲　髙橋蒼功　髙橋幸江
滝口栄珠　滝沢みさき　竹中光順　田嶋慎仙
田中裕也　玉村華堂　段野真希　手川翠鶴
寺崎登美子　長尾桜春　長尾和香　根本恵和
橋本智津　長谷川惠子　平田玲憲　福岡華泉
福田佳子　福塚光徳　藤永真理　藤原芳苑
古川紫虹　宗島余光　山井奈々子　山浦柚美
山田桂子　吉田　愛　吉村菜採　若麻績弘道
和田靖子

入　選（五十音順）

安養七詳　阿部　寛　荒井蓬月　新井美帆
石井宗子　石川光寵　石川清香　石川青流
石川知重　石田正道　市川美子　伊東芳苑

伊藤幹夫　稲生妙子　稲木芳華　井堀咲麗子
植竹美帆　植松走風　臼井典子　薄木逸醉
浦崎明美　瓜田余響　江上桐佳　榎本輝映
大河原佳子　太田君江　大場青峰　大森栄芳
岡田信来　岡野ひろみ　小川兆史　小川悦雄
小澤洋子　小野翠香　小野田子雪　尾和恵扇
鹿島由美　数本慈雨　片倉　幸　加藤紅苑
金子きみ代　鎌形美容　川島遙青　川端紫雲
木下正覚　国吉和子　久保田渓堂　倉持昌世
黒田真弓　毛塚佳泉　小池礼凌　小坂玲春
後藤詩織　後藤田妙子　此永百花　小林和可奈
小堀恭子　小森カズエ　齋藤天聽　坂口白峰
坂　貴大　坂本拓海　佐々木清美　佐藤榮壽
佐藤響雅　佐藤摂子　佐藤保恵　佐藤玲信
佐鳥光浩　鮫島遥菜　沢田宏子　椎　霞扇
重田江彩　篠崎文江　島田和実　清水享鶴
志村幸子　末永美和　杉山葉月　杉山雅子
鈴木教子　鈴木白明　須藤隆史　関根邦江
高内芝蘭　高木睦子　高橋貞松　竹内百紀江
竹淵　晃　竹本萩嶺　武山麻美　田中さち子
田中春曄　田中多加代　田中元光　田中玲子
谷　俊子　玉井香敬　田村游古　千野霜月
辻子遊山　津山紫陽　手塚恵翠　寺岡恵風
東方陽周　徳永慈峡　豊嶋勇太郎　豊田光暁

鳥海理恵　中込雅恵　南雲鷺草　奈良京華
西岡美知江　西澤緑風　根本由紀　長谷川洸春
長谷川理華　林　葵丘　林　玲山　膝附史穂
平野渚秋　広沢光香　深川兆瑤　深野幾与子
福里清晨　福島征英　福本澄鮮　福本明暢
藤崎澄瑩　藤田靄香　古谷幸子　堀佳代子
本間雅鳳　本間祥雲　前口紅泉　牧野博子
舛田昌玄　増田千鶴　松尾滋厚　松沢上清
松野浩範　松本娟秀　三浦道子　三木智加
水吉福子　御田村翠玉　宮澤栄子　宮島奈々
森　敬子　山上尚子　山田静光　山田緑水
山田緑亭　山本紫香　山本緑里　山本玲峰
横瀬晃子　横瀬克江　吉田圭秀　吉田壮秀
吉田直美　吉野裕子　若麻績實豊　和田光翠
渡邉絵里　渡辺佳祥　渡辺仁美

第58回 太玄会書展　会場風景

平成29年１月19日㈭～24日㈫ 会場：東京都美術館

会場風景

会場入口

日展理事　新井光風先生（中央）

第１回学生選抜展

第58回 太玄会書展　審査風景

平成29年１月14日㈯～15日㈰ 会場：東京都美術館

審査２日目

審査１日目

会員賞選考風景

審査部スタッフ

審査２日目

当番審査員

会員賞選考委員

第58回 太玄会書展　特別講演

平成29年１月20日㈮14時開始　会場：東京都美術館

講演会風景

講師　日展会員　有岡郊崖先生

挨拶　笠原聖雲会長

会場風景

講演会風景

演題　書のモダニズム　＝先人名家の作品を中心として＝

講師　日展会員　有岡郊崖先生

芸術には様々な分野があるが、その中でも奥深いのが書である。そもそも書の本質とは何なのか。それは一筆の生命内容のもつ放射力と、その反応としての空間のひびきといえる。このことが昔からの書表現技法上の第一義であって、この問題の意味を深く認識することが必要である。書というものは現象の描写でもないし、詩文の意味の表現でもない。また調度的な装飾でもない。書は文字という素材を通じて、自らの核心にすわったこころをあらわすものであると私は思う。趣味や情緒は確かに表現を左右するものだが、そのもの自体が書の第一義ではない。また、書の表現は教養主義（アカデニズム）と表現主義（モダニズム）との融合である。中世・近代（戦前戦後）の書事情（書に対する思想的な背景）を経て、一つの思想で世界が統一されるのではなく、様々なイズムが台頭することである程度自由でも許容されるのが近代なのかもしれない。

このように書を定義づけ、漢代までの認識としての書から王羲之の時代になり鑑賞や評価される時代となる。書そのものが特権階級で育まれてきた文化であることから、書き手は優れた書を目指すために技法だけでなく、教養を身に着けることを重要視するようになってきた。歴代の名家の作品には深い教養主義に基づいた古典の書や漢籍の知識が根底にあり、その上で表現主義に発展している場面を多く見ることができる。米芾「蜀素帖」には王羲之「蘭亭叙」を彷彿する箇所、王鐸、楊峴、呉昌碩が文字学や多く古典への造詣があることを作品を通して理解することができる。また日本では西川寧先生、手島右卿先生、赤羽雲庭先生、青山杉雨先生、鈴木翠軒先生、比田井天来先生の書業の中に教養主義を根底に独自の表現を打ち立てたことを見ることができる。

現在、書道界全体がやや停滞気味である。先人の行いをもう一歩進めることはできないか。ただ作品を書くのではなく、自分なりに工夫してみようという作家の心に閃きがないと新しいものは生まれないのではないか。私たちは自分たちの書をこれでいいと満足するのではなく、自分の心にある思いを投影する書であってほしい。みんなで前に向かって書に精進していきたいものである。

（編集・広報部）

作品解説

金丸鬼山事務局長

石川流芳副会長

垣内楊石副会長

荒井湧山理事実行委員

伊藤慈恩理事実行委員

伊場英白副事務局長

※会期中は午前１１時から６名の役員がそれぞれ個性を生かし、制作者の意図や人柄、そして感想を交えながら解説を行った。来場者も解説に合わせて作品を鑑賞することができた。

席上揮毫

小出聖州副事務局長

伊東玲翠副事務局長

鈴木暎華理事・運営委員

江原見山副事務局長

西村東軒理事長

大場大幹理事・実行委員

高校生による席上揮毫

中高生による席上揮毫

石井光華理事・総務

宮負丁香副理事長

※15団体の特長を生かし、それぞれの筆者が様々な書風を披露した。今回は学生選抜展を併催したことにより、中高生にも参加してもらい緊張しながらも集中して書く姿に来場者の多くが元気をもらうことができた。

第58回 太玄会書展　授賞式・祝賀会

平成29年１月22日(日)16時30分開始　会場：上野精養軒

授賞式

運営委員

審査事務報告
飛田冲曠理事実行委員

挨拶
西村東軒理事長

開会の辞
小原天簫運営委員

授賞式風景

今年度当番審査員

閉会の辞
宮負丁香副理事長

授賞式風景

太玄賞受賞者

太玄大賞受賞者

祝賀会

乾杯の発声
読売書法会事務局長　山崎俊滋氏

祝辞
全日本書道連盟理事長 星弘道先生

挨拶
笠原聖雲会長

開会の辞
垣内楊石副会長

閉会の辞
石川流芳副会長

祝賀会風景

第58回　太玄会書展　授賞式・祝賀会

平成29年1月22日(日)18時より上野精養軒にて授賞式に続き祝賀会が行われた。授賞式は、壇上に運営委員、舞台両側に今年度当番審査員が列席し、厳かな雰囲気の中で挙行された。

授賞式　挨　拶　西村東軒 理事長

ご来賓はじめ関係各社への日頃の感謝を述べた後、「太玄会はこれまでの諸先輩の尽力により基礎を作っていただき、それを継承し繁栄することが私たちの使命であり、そのためにも会員の作品制作への情熱が必要である。また、会期中に開催された特別講演で有岡郊崖先生の講話から、教養主義、表現主義を踏まえ、生命感ある作品を作るためには、自分が何を訴えたいのかを明確にしないと魅力あるものにはならないと理解した。この度、入選入賞した皆さんはその中で評価されたということ。今後も精進を期待するとともに、それを太玄会の発展に繋げてほしい」と激励した。

祝賀会　挨　拶　笠原聖雲 会長

多くのご来賓にお越しいただいた深謝を述べ、受賞者への祝辞を述べた。その後、太玄会のこれからの在り方について、「私たち太玄会は15の社中が集まり、諸先輩の業績を受け継ぎ第58回展を開催することができた。今回は席上揮毫、ギャラリートークの他、新たに第1回学生選抜展を併催し、多くの来場者に作品を見に来ていただいた。また、特別講演では有岡郊崖先生をお招きして貴重な講話をいただいた。講話を拝聴して、私たち太玄会は古典主義、表現主義の伝統を大事にすると言いながら、まだまだ勉強が足りないのではないか、表現についても自分の社中に囚われすぎずもっと幅広く学ばねばならないのではないかと感じた。再来年は60回記念展となるが、その時、太玄会は変わったなというお言葉を頂けるよう邁進したい」と熱い思いを語った。

祝賀会　祝　辞　日展理事、全日本書道連盟理事長　星　弘道 先生

星弘道先生からは、入賞入選者への祝辞とこれから益々の活躍を祈念するお言葉を頂戴した。祝辞の中で「会場では多くの社中構成による様々な作品を楽しく拝見できた。先ほど笠原会長から、師匠を追随することについてのお話があった。私たちは師匠の手ほどきを受けることから、どうしても師匠のＤＮＡを拭い去ることができない。ただ、これが一番大切なのではないかとも思う。書は積み重ねが大事で、師匠を通して、また古典を学ぶことを通して、自分で発見し作り上げていかねばならない。そのためには修練が大事である。今回、学生展が開催されたことは非常に意義あることである。全日本書道連盟は書を盛り上げることを目標にしているが、そのためには教育の力が必要である。どうか将来に書を残すためにも皆さんの協力をお願いしたい」と今後の書を見据えたお言葉を頂戴した。

祝賀会　祝　辞　読売書法会事務局長　山崎俊滋 氏

山崎俊滋氏からは乾杯発声の前に受賞者への励ましの言葉を頂戴した。「この度の受賞者は、15団体が集まるからこそ、各社中のＤＮＡを持ちながら新しい方向を各自が模索し、それが作品でスパークした方々。これからの太玄会の新しい流れを作っていけると判断し選ばれた人たちだと思う。どうかこれからも会員の皆さんで新しい方向を見出していっていただきたい。これからも健康第一でご活躍を祈る」とお言葉を頂き、盛大に乾杯へと移った。

第58回太玄会書展

謝　辞

受賞者代表　書人社　長谷川渓華

この度は、第五十八回太玄会書展におきまして栄えある賞を賜わり誠にありがとうございました。

これも偏に本日ご臨席の諸先生方はじめ、諸先輩の皆様方のお陰と深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

特別講演の中で、有岡郊崖先生からは古典を良く学び、生命感溢れる作品を書くこと、書を通して教養を高めること等々、貴重なお話を身の引き締まる思いで拝聴しておりました。

また、会場では力強い学生部の作品に対し、私たちは沢山の元気をもらいました。

この度の受賞を機に、微力ながらも太玄会にお役に立てるよう精進して参る所存でございます。

今後とも変わらぬご指導を賜わりますようお願い申し上げます。

本日は、本当にありがとうございました。

平成二十九年一月二十二日

授賞式風景

謝辞　長谷川渓華氏

授賞式風景

太玄会所属団体のこの一年の活動（平成28年3月～平成28年11月）

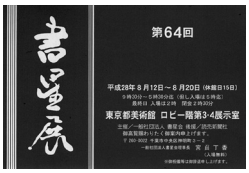
書星会

第64回書星展

会　期　平成28年8月12日(金)～20日(土)

会　場　東京都美術館

代表者　宮負丁香



一室に大作、屏風、10m巻子を置き書星会独自の展示で見ていただきました。会期中は毎日の作品解説と三回の席上揮毫を行ないました。外部からの反響はまだ分かりませんが魅力ある書展にしたいと考えています。

本展の他、地元千葉県立美術館に於きまして平成28年1/19～1/24迄「第27回書星選抜展」を再開しました。大作の他、169点の小型条幅を展示し、本展とは異なる書星展を見ていただきました。

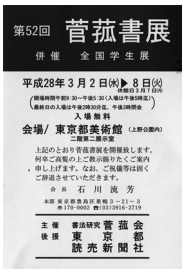
菅菰会

第52回菅菰書展

会　期　平成28年3月2日(水)～8日(火)

会　場　東京都美術館

代表者　石川流芳



第52回菅菰書展を上野の東京都美術館で3月2日より開催いたしました。

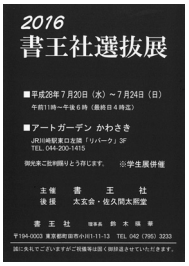
今年は初の試みで，役員4名、会員から10名が各自好みの法帖を折帖に臨書出品いたしました。一年を通じて古典の臨書に取り組み壁面作品にその成果が表われる様今後も続けていきたいと思います。又併催の学生展も会場を賑わせてくれました。

書王社

2016書王社選抜展

会　期　平成28年7月20日(水)～7月24日(日)
会　場　アートガーデンかわさき
代表者　鈴木暎華

銀座で三十二年間開催してきた書王社選抜展が、今回は書王社発祥の地川崎に会場を移して開かれた。初代会長鈴木景堂先生の遺墨十点を中心に出品者四十名の作品が広く明るい会場で輝いていた。川崎には会の役員や会員も多く、積極的活躍で連日大勢の来場者約八百名で賑わい、学生展併催で学生出品者三十七名の親子そろっての鑑賞で、次回への期待も増加しつつ無事終了出来ました。



書王社条幅研究会

会　期　平成28年10月22日(土)
会　場　神奈川県立武道館
代表者　鈴木暎華

神奈川県立武道館の剣道場を会場とする第四回目の条幅研究会が開催された。講師の鈴木暎華先生より作品への注意点などのお話をいただき、幹事からは詳細な説明の後、四十八名の参加者は広い会場でゆったりと場所を使い「菊散金風起」の課題を伸々とした半切作品に取組んだ。二時間の練習の後、役員二名と暎華先生の席上揮毫を熱心に見て、参加者各人の作品に対し暎華先生より懇切丁寧な講評が行なわれた。夢中になって研究した時間も、楽しかったがあっという間に終ってしまったと参加者の感想が多かった。

研友社

第29回研友社展

会　期　平成28年10月11日(火)～16日(日)
会　場　東京銀座画廊・美術館
代表者　田中鳳柳

今年も銀座画廊・美術館での開催であり、会員45名の力作を展示することができました。また、研友社展では、田中会長所蔵の明清時代の名品が展示されることが恒例となっており、今年は、清時代揚州八怪の鄭燮の「花卉と奇石の水墨画」と金農の「尺牘」が特別展示され、その展示予定は、産経新聞に予告されました。来年は、30回記念展ですので、今から会員全員で準備していこうと考えています。

書作錬成会（春・夏）

会　期　平成28年3月20日(日)
会　期　平成28年7月17日(日)
会　場　浦和鵞毛堂錬成会場

研友社錬成会は、年2回開催しています。春は産経国際書展、夏は研友社展・太玄展に向けての書作錬成が主な目的です。日ごろ直接ご指導を受けることのできない会員の皆様も、直接田中会長から指導を受けられる絶好の機会とあって、毎回25名程度の会員が参加し、熱心に書作に取り組んでいます。

真　仙　会

第50回記念真仙会書道展

会　期　平成28年4月22日(金)～26日(火)
会　場　ながの東急百貨店
　　別館シェルシェ5階ホール
代表者　小　出　聖　州

第50回記念真仙会書道展は4月22日から26日までの5日間、長野市のながの東急百貨店別館シェルシェ5階ホールで開催されました。この記念企画として故小出聖水先生の色紙50選展を併催、第37回真仙会学童書道展も開かれ、会場は期間中終日賑わいました。

この50回を記念して期間中の24日午後3時から多くの来賓を招き、駅前のホテルに174人が出席、盛大に祝賀会が行れ、こちらもにぎわいました。

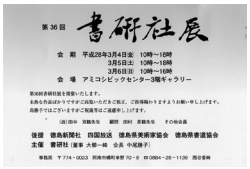
出品作品の図録と小出聖水先生色紙50選の作品集も併せて刊行され、充実した50回記念事業ができました。

鳥　跡　会

書研社

第36回記念書研社展

会　期　平成28年3月4日(金)～3月6日(日)
会　場　アミコシビックセンター　3階ギャラリー
代表者　中　尾　勝　子



書研社は（故）田中双鶴先生が創られた会である。

毎年5月に総会を開き一年間の行事予定を組み、月一回の割合で錬成会を行い会員相互の親睦と錬成につとめている。

一年間の錬成の成果を書研社展で発表することとしている。今年は30人の会員が59点の作品を発表した。会の特長として一人が漢字と仮名作品を出品（原則）していることである。

出品者29人51点の作品を展示しました。

臨書や漢字・調和体の作品を会員の錬成の成果として発表しました。バラエティ豊かで、楽しい展覧会と好評でした。

耿の会

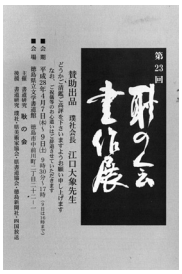
第23回耿の会書作展

会　期　平成28年4月7日(木)～9日(土)

会　場　徳島県立文学書道館

代表者　弘　田　長　風

今年で23回目となった耿の会書作展は、学生の部94人の作品を含め、



鳥跡会

鳥跡会合同錬成会

会　期　平成28年9月4日(日)

会　場　春日会館

代表者　中　尾　勝　子

鳥跡会は耿の会、一心会、書研社、個人で構成された合同体である。それぞれの会が独自に計画を立て、錬成会を行い社中展を行っている。年に一回、三つの会の鳥跡会員が集って、太玄書展のための錬成会を行っている。

書道研究一心会

第15回記念一心会書展

会　期　平成28年9月22日(木)～25日(日)

会　場　阿波銀プラザ

（徳島市東新町一丁目）

代表者　南　　溪　石

会員一年間の研修成果を発表。

展示概要につきましては、漢字作品を中心に、調和体、仮名作品を加え、総数60点を展示いたしました。本年は第15回の記念展でもありますので、臨書作品の展示も試みました。

お陰で、盛況裏に終えることができました。

九　龍　社

第57回九龍社書展

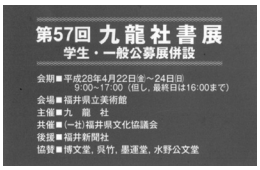
会　期　平成28年4月22日(金)～24日(日)

会　場　福井県立美術館

代表者　垣　内　楊　石

小学生から一般までの公募作品の中から選ばれた上位入賞者と会員の作品計517点が広々とした会場に陳列されました。

会期中は天候にも恵まれ多くの来場者で賑わいました。表彰式が行われた23日には、とりわけ多くの家族連れで賑わい、受賞作品の前で記念写真を撮って喜ぶ姿が見られました。



九龍社宿泊研修

会　期　平成28年7月23日(土)～24日(日)

会　場　越前市しぶき温泉湯楽里

代表者　垣　内　楊　石

本年度の研修会では、国道から山合いに入ってすぐの温泉施設で行われ、多くの参加者で賑わいま

した。

持ち寄った臨書作品の鑑賞会や垣内先生による揮毫会が行われました。また練習会場では、お互いに感想を言い合いながら熱心に作品制作に取り組む姿がありました。会員の親睦も深まり大変有意義な二日間となりました。

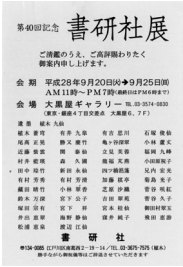
書研社

第40回記念　書研社展

会　期　平成28年9月20日(火)～25日(日)

会　場　大黒屋ギャラリー

代表者　植　木　蒼　穹


第40回記念 書研社展

ご清範のうえ、ご高評賜わりたく
御案内申し上げます。

会 期　平成28年9月20日(火)▶9月25日(日)
AM11時～PM7時(最終日はPM6時まで)

会 場　大黒屋ギャラリー TEL.03-3574-0830
(東京・銀座4丁目交差点　大黒屋6、7F)

書研社展は、第40回記念展となり、小作品から全紙大までの作品を展示致しました。新師範の出品者も加わり、総勢42名が参加し、初代会長植木九仙の作品と共に全67点が、ギャラリー6、7階に分けられました。

多くの方に御来場頂き、御高評を賜わりましたこと、厚く御礼申し上げます。

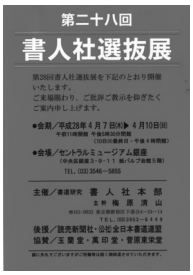
書人社

第28回書人社選抜展

会　期　平成28年4月7日(木)～10日(日)

会　場　セントラルミュージアム銀座
（紙パルプ会館5F）

代表者　梅　原　清　山


第二十八回
書人社選抜展

第28回書人社選抜展を下記のとおり開催いたします。
ご来場賜わり、ご批評ご教示を仰ぎたくご案内申し上げます。

●会期／平成28年4月7日(木)▶4月10日(日)
午前11時開館 午後3時30分閉館
(10日は最終日・午後4時閉館)

●会場／セントラルミュージアム銀座
(紙パルプ会館2-3-15 1階パルプ会館5階)
TEL.(03)3546-5855

主催／書道研究 書人社本部
主宰 梅原清山
(郵101-0052 東京都千代田区神田小川町2-24-14
TEL.(03)3512-4419)

後援／読売新聞社・公社全日本書道連盟
協賛／玉葉堂・萬印堂・菅原東栄堂

作品は額装2尺×3尺、軸装連落8尺用画仙紙の4分の1。作風は各自にまかせていますが、書風書体がバラエティに富むことを極力奨励しています。

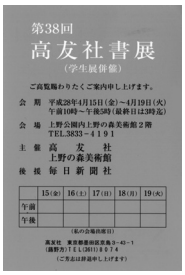
高友社

第38回高友社書展（学生書展併催）

会　期　平成28年4月15日(金)～19日(火)

会　場　上野の森美術館2階

代表者　蕗　野　雅　宣


第38回
高友社書展
(学生展併催)

ご高覧賜わりたくご案内申し上げます。

会　期　平成28年4月15日(金)～4月19日(火)
午前10時～午後5時(最終日は3時迄)
会　場　上野公園内上野の森美術館2階
TEL.3833－4191
主　催　高　友　社
上野の森美術館
後　援　毎日新聞社

	15(金)	16(土)	17(日)	18(月)	19(火)
午前					
午後					

(私の会場出席日)

高友社　東京都墨田区横川3-42-1
(錦野方)TEL(0011)8874
(ご用点は郵送申し上げます)

毎年４月に行われる高友社書展は、今年も会員118名、学生151名の参加で賑やかに開催されました。内容も漢字を中心に、仮名、近代詩文書、篆刻、書簡、ペン字など多彩で、それぞれの大作、小品が並びました。併催の学生展も定着し、親子、祖父母の見学者等で、特に土曜、日曜の会場は大いに賑わいました。太玄会の先生方にも多数ご来場賜わり厚く御礼申し上げます。

第８回合宿

会　期　平成28年８月28日(日)～８月29日(月)
会　場　ニューウェルシティ湯河原
代表者　蕗　野　雅　宣

恒例の８月合宿は、日常生活から離れ書に専念できる貴重な機会となっています。各人が太玄展、高友社展の作品製作や昇段試験の課題に幹部の先生方からの指導を受けながら取り組みました。２日目は「九成宮醴泉銘」と「寸松庵色紙」の臨書と倣写にチャレンジし、基礎的な勉強にも力を注ぎました。

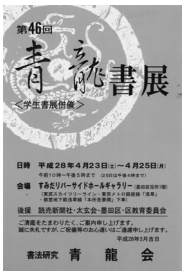
鼎　墨　会

合宿錬成会
会　期　平成28年６月４日(土)～６日(月)
　　平成28年11月６日(日)～７日(月)
会　場　河口湖　民宿

毎年６月初旬と11月初旬に２泊３日の合宿錬成会を実施しており、少人数になりましたが、継続しております。春は官公書展に出品する為、秋は太玄会書展に出品する作品の書込みを行い、全体構成等を仕上げる為に必要な行事になっており、お互いの知識向上にも役立たせております。

青　龍　会

第46回青龍書展（学生書展併催）
会　期　平成28年４月23日(土)～25日(月)
会　場　すみだリバーサイドホール
　　ギャラリー（墨田区役所１階）
代表者　下　谷　蘓　雪



今年度は２×８(縦)だけでなく、４×６・２×８・２×６(横)を増し会場壁面の変化を考えました。又、学生展出品者が増え予定会場に入りきれず、一般部の壁面に上位入賞作品を展示しました。学生高学年にとっては、「次は一般部に出品したい」「書道を続けたい」との声も聞こえ、嬉しく思いました。

今年も会員による生花も会場を盛り上げました。

燎原社

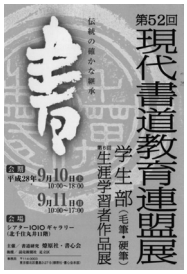
第52回現代書道教育連盟展

会　期　平成28年9月10日(土)～11日(日)

会　場　北千住丸井11階

　　シアター1010ギャラリー

代表者　堀越壽嵒



本年2月弊社代表佐渡壽峰急逝後初めての社中展となりました。自由課題「香、宝、遠」を交え、縦横小作品の作者ごとの展示は評判も上々でした。恩師への感謝を胸に社中一丸で臨んだ展覧会は、天上にも無事届いた事と確心しております。これからも皆様のご支援を宜しくお願い申し上げます。

平成29年度太玄会所属団体の活動予定

団体名	代表者	活動内容	開催日時	会場
書星会	宮負丁香	第65回書星展	11月10日(金)～11月16日(木)	東京都美術館
菅孤会	石川流芳	第53回菅孤書展	3月2日(木)～3月8日(水)	東京都美術館
書王社	鈴木暎華	2017書王社選抜展	7月19日(水)～7月23日(日)	アートガーデンかわさき
		王会条幅研究会	10月28日(土)	神奈川県立武道館
研友社	田中鳳柳	書作錬成会	3月及び7月	浦和鷲毛堂錬成会場
		第30回記念研友社展	10月10日(火)～10月15日(日)	東京銀座画廊・美術館
真仙会	小出聖州	教養書道講座2回	未定	
鳥跡会	中尾勝子	第37回書研社展	未定	アミコシビックセンター・3階ギャラリー
	弘田長風	第24回耿の会書作展	未定	
	南　溪石	第16回記念一心会書展	未定	
九龍社	垣内楊石	第58回九龍社書展	未定	福井県立美術館
		九龍社宿泊研修会	未定	
書研社	植木蒼穹	第41回書研社展	9月19日(火)～9月24日(日)	大黒屋ギャラリー（6・7階）
書人社	梅原清山	第29回書人社選抜展	未定	セントラルミュージアム銀座（紙パルプ会館5F）
高友社	蕗野雅宣	第39回高友社書展	4月15日(土)～19日(水)	上野の森美術館2階
		第9回合宿	8月27日(日)～24日(月)	ニューウェルシティ湯河原
青龍会	下谷蘊雪	第47回青龍書展学生書展併催	4月22日(土)～4月24日(月)	すみだリバーサイドホールギャラリー（墨田区役所1階）
燎原社	堀越壽嵒	第53回現代書道教育連盟展	9月9日(土)～9月10日(日)	北千住丸井11階シアター1010ギャラリー

浅見錦龍先生を偲ぶ

平成二十七年一月二十八日、浅見錦龍先生が安らかにご逝去されました。

心よりお悔やみ申し上げますとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

合　掌

弔辞

書星会参事　岩波白鵬

浅見錦龍先生、謹んでご逝去を悼み、生前のお教えに対し、あらためてお礼申し上げます。もう二度と帰らぬ先生の御霊に、最後のお別れの言葉を申し上げなければならないことは、悲しい限りであります。

先生は上州赤城の山麓前橋に生れ、厳父喜舟先生と新潟・高田よりここ第二の故郷となる、房総の地に移られ、よく「親父の背中を見て育った」と語っておりました。先生は書家になろうと決心したのは中学三年生、十五才の時だったと聞いて居ります。その年の夏、千字文を半紙に二字ずつ五百枚にわたり書き、更に空海の風信帖の全臨を果されたことなど研鑽を積み、教師を目ざして東京豊島師範学校へ昭和十六年入学し、激しさを増す戦火の中、血気さかんな青年学徒だった先生は、海軍飛行予備学生として、三重海軍航空隊へ入隊、私物持ち込みは禁じられていたが、顔真卿の「祭姪文稿」を行李の底に潜ませて入隊、間もなく発覚し返送されたこと、零戦のパイロットとして終戦まで四百時間の特攻訓練、昭和二十年八月十五日、終戦と同時に九死に一生を得、無事帰郷してみると、祭姪文稿が待っていた。「自分は運がよかった」とよく語っていた。

戦後、書に目覚めた先生は、手島右卿先生の古典学書の方法論を学びに、上京、私も一緒に同行させてもらったことも、今は懐しい思い出であります。丁度その頃が先生との出合いであり、県立船橋高等学校勤務の頃、登龍社の前身、宮坂書道会を興し、県内の若い人達が先生の指導を受けようと、山のように作品を持ちより、指導を受け、終れば杯を乾し乍ら書道談義、談論風発、旧恋懐暮の地を思い出しては、「俺は河原の枯れすすき」と歌い、車をとばして東京へ出かけてみたり、情熱の限りの教壇と、日展への精進の若き日々だった。

その頃から指導を受けた弟子の宮負丁香さんが書星会理事長、伊場英白さんが副理事長として書星を支え、会員の研鑽を積み、書星展、読売展、太玄展、そして、県展、日展へと活躍の場を広げ、限りなき書道芸術の真髄を求めて励み、先生の後を追い、その階梯を登っており、金鱗が燦然と輝いている、今です。ご安心ください。

先生の書道展での活動のあとを、いくつかたどってみますと、日展での特選、苞竹賞、菊華賞、会員賞、そして審査員として活躍され、読売展参事、太玄会名誉顧問、千葉県美術会名誉会員、千葉県書道協会顧問、書星会顧問などを歴任され、第二の故郷千葉はもとより、中央の書道界での美の創造、錦龍芸術は燃え続き、千葉の、日本の書芸術の牽引者として永く後世に伝えられるものと思います。

九十二才のお歳まで、与えられた命を書一筋に懸命に生き抜いてきた先生のご業績は、私が説明申し上げるまでもなく、広く世に知れ渡っております。そのひとつ一つが私達の心と記憶のなかに永遠に生き続けることでしょう。先生の後に続く書人として、先生の精神を引き

継いで行くものと信じて居ります。
残念ですが、お別れを言わねばなりません。浅見錦龍先生、なにとぞ天にあって、いつまでも、私どもをお見守り頂きますようお願い申し上げます。
先生を偲び、教訓を生かしていくことが、唯一の報恩と考え、そのことをお誓いし追悼の言葉といたします。
いよいよお別れの時です。黄泉の国へ平安な旅を心からお祈りいたします。
先生、さようなら　合掌
平成二十七年二月四日

師、錦龍先生

書星会副理事長　伊　場　英　白

昭和四十七年十二月のとても寒い日、京成線『センター競馬場』駅に降り立ち船橋の宮本にある『登龍舎』（廬号）浅見錦龍先生宅を訪ねました。先生とお話をしたのはそれが初めてで僕は大学一年十九歳、先生は五十歳で県立船橋高等学校へお勤めでした。
錦龍先生の社中『登龍社』のメンバーは書星会の核として活躍している人が多く、僕がその環境に自然に入っていけたのも錦龍先生の厳しい指導と温かい配慮があったからこそと感じています。
僕の四十年以上の書道人生は良くも悪くも『浅見錦龍漬け』でした。最初の出会いから何十年もの間、書を中心に様々な場面で自分の父親以上に時間を共にし厳しい指導をしていただきました。
錦龍先生の書に対する思いは熱く、ご自身の制作題材の選定方法、書表現のセンス、愛玩用筆の作成、展覧会場に屏風作品、役員とか指導者の区別なく皆で同一古典の臨書を折帖で表現したものを出品、県内での地区展の発案、などなど挙げたらきりがありません。
思い立つと忘れないうちにとのことで弟子に葉書又は手紙で書に対する指導、展覧会出品作の批評をされてました。僕は書作品の批評はもちろんのこと、よく葉書とＦＡＸで書に関する調べものの依頼を受けました。
当然のことながら書に対する指導はとても厳しく、先生の理想に追いつかない弟子たちをよく嘆いておられました。僕もそのうちの一人ですが、ただ作品の制作については必要以上に縛られることなく割と自由に育てられたように今は感じています。
錦龍先生ご夫妻には媒酌の労をおとりいただきました。また、食事会や酒席も随分とご一緒させていただき、そのことが酒の弱い小生が少しだけ酒席に馴染めるようになった要因だと思います。
学生時代に『伊場君、たまには酒でも飲んで書いてみたらどうだい』とお稽古の時、僕の作品を見てあまりにも不味かった為に先生はそう云われたのでしょう。飲んで書いてみた事もありますが、さてどうだったのでしょうか…。
陶芸の好きな先生は社中の会員と備前、唐津、常滑などを訪ね字入れをしたりしました。
焼き物を愛でる楽しさを知ったのも先生の影響です。
心静かに振り返るとやはり僕の人生の大半に関わりをいただいた大

師匠であったわけであり感謝の言葉以外には見つかりません。

僕の最終勤務校が県立船橋高校であり、学生時代に何度となく訪ねた錦龍先生の過ごされた書道準備室で教員生活の最後をむかえることができたというのも縁を感じます。

先生が幽明境を異にされてもう二年が経とうとしています。先生の『生誕一〇〇年展』にむけて実行委員会をたちあげました。書星会も宮負理事長を中心にして書に対し真摯に向き合いながら一歩一歩着実な歩みをしています。錦龍先生どうぞ天上界から見守っていてください。

合　掌

錦龍先生の教え

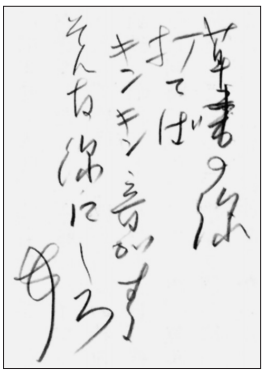
飛田　冲曠

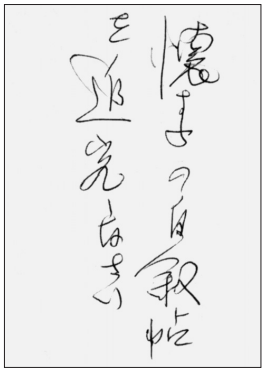
浅見錦龍先生に入門したのは昭和五十年の暮れでした。それ以前に、書星会の競書審査のお手伝い、錬成会などに参加させて頂きました。ただ、ただ凄い先生だなという印象でした。いざ入門してみると、怖いの怖くないの、叱られっぱなしです。「書の古典は何をしてるんだい」が入門時の先生の第一声でした。私は毎月の競書だけを書いていたので、答えることが出来ず、会話はとんちんかんになりました。その日より「書へのこだわり」が始まりました。未だに解放されていません。私にとって、次元の異なる先生を理解するのは、複雑すぎてますます遠い存在になったのを覚えています。

当初のお稽古では、実際に目の前で、お手本を書いて頂くことが多く、口頭だけでは解からないところが「アア、そうか」「なるほどなあ」と感嘆することしきり。錦龍先生に少しでも近づきたいものだと思ったことでした。

長年の御指導の中でも、「線」について、「打って　吐いて　弾いて引くんだ」という教えを今でも自分は大切にしています。「考えるな」と言われて逆に考え込み、力みすぎて返って堅くなり、歯痒い結果になることもしばしば。このような時に錦龍先生より、左記のようなハガキを頂きました。増々「線」についての味わいや、奥深さへの思いを改めて大切にしたいと思いました。更に、草書体の法帖についても自叙帖を「しっかりやれ」と励まされました。もっともっと精進しなければいけないと思っています。

この二通のハガキは私の宝物です。





合　掌

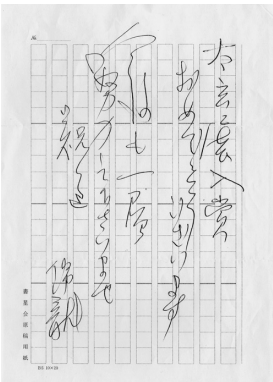
錦龍先生の思い出 ―船高の授業―

山田騰沸

「もっとクルクルと書いてください」高校生達は魔法のように繰り出される字に驚きながらも、更に注文をした。「おお、そうか、そうか」と目を細めながら、次から次へと益々楽しそうに参考に書いてくださった。

ある時は、水を含んだ大筆の片腹に濃い墨をつけて、菖蒲の葉の表裏を書き、書道以外の芸術、写真や焼きものの話を特徴ある笑顔でされていた。私達は尊敬の念をも込めて「錦ちゃん」と揮名した。

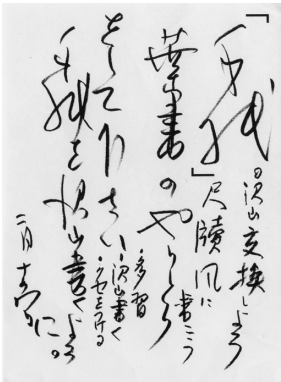
授業では実際に書くところを見せたり、熱っぽく拓本の話などもあったと記憶している。教室内には各書体のパネルや大きなガラスケースに掛け軸や水滴などのお宝が並び、前方には喜舟先生の大きな額、色紙大の「長嶋茂雄」篆書による印稿。造像記の拓本パネル。研究室には洋画の小品。何と贅沢な空間を共有させていただいたことか。

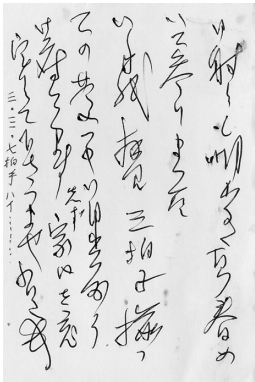


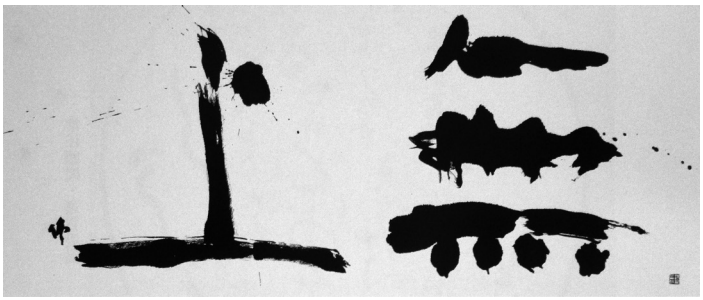
先生もよく船高時代の話をされていた。曰く「よく見る顔だと思ったら双子が二人共選択していた。とか生徒の席で筆を執り、書かないうちに墨の薄いのを指摘すると「よく分かりますね」と言われたことなどユーモア交じりに語っていらした。ついこの間まで。

先生には長い間本当にお世話になりました。先生の教えを思い出しながら、牛歩ではありますが、学んでいこうと思います。どうぞ見守っていてください。

合掌



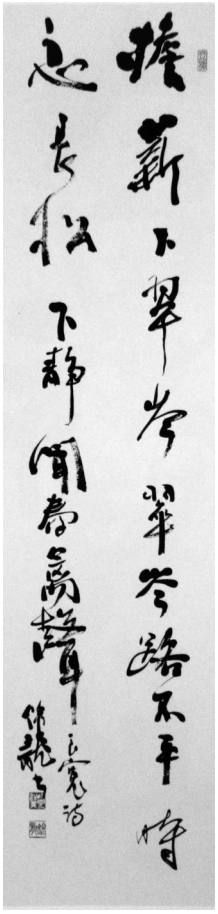




平成 18 年　第 47 回太玄会書展

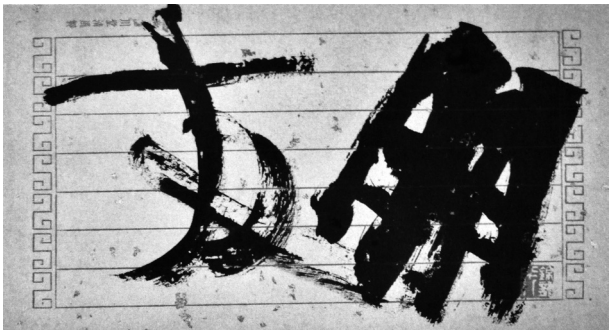
平成16年　第45回記念太玄会書展

平成25年　第54回太玄会書展

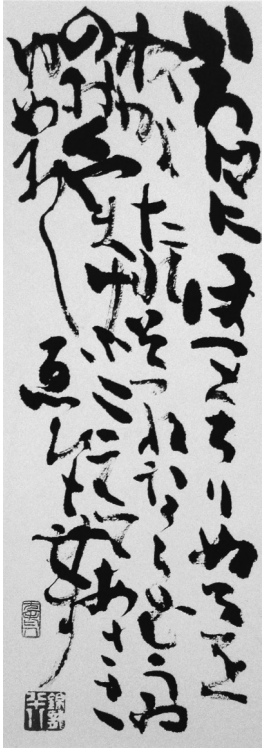


平成28年　第57回太玄会書展

平成27年　第56回太玄会書展



平成 22 年　第 46 回太玄会役員書展



平成23年　第47回太玄会役員書展

平成24年　第48回太玄会役員書展

平成27年　太玄会役員選抜書展

平成26年　第50回太玄会役員書展

佐渡壽峰先生を偲ぶ

平成二十七年二月十八日、佐渡壽峰先生が安らかにご逝去されました。
心よりお悔やみ申し上げますとともにご冥福をお祈り申し上げます。

合　掌

恩師との思いで

燎原社　杉本雅峰

昨年の二月十八日に佐渡会長がお亡くなりになりました。

九十二歳という高齢ではありましたが、錬成会の帰りに病室に寄って、書いたものを見て戴いたことも、病室に呼ばれて、会のこと、勉強の方法などについて指導をいただいたり、お叱りを受けたことも度々有りました。意欲満々で、病院からリハビリ施設に転院して、退院の日を待っているものとばかり思っていました。私たちにとってはまだまだ教えて頂きたいことはたくさんありました。

奥様も十月二十二日に後を追うようにお亡くなりになり、今は以前のように、お二人で楽しく過ごしておられることと思います。

先生との出会いは、今から四十年以上前になります。二十五、六のころ、前の年に筆で書いた年賀状があまりにみっともなく恥ずかしく思い、近所の書道塾に入会しました。そこが先生のお姉様の薛如先生のご自宅であり、佐渡先生の教室でもありました。

先生の書風にあこがれたとか、名声に引かれたとかではなく、ただ家から一番近かったというだけの先生との出会いでしたが以来、仕事が忙しいのを理由にすぐにさぼり、筆を持たない私をここまで、引っ張ってきてくれました。書道を続けてこられたのは、お二人のおかげだと思っています。

先生がお亡くなりになった今になって、ようやく字を書くことが楽しいことに思えるようになってきました。十年も前にこの様な気持ちになっていたら、もっといろいろなことを教えて頂けたのではないかと、取り返しのできない後悔がありますが、長い間丁寧にご指導頂いた先生に感謝しています。ありがとうございました。

先生を偲んで

燎原社　今田柳邨

三十年を越える長い間、どうにかここまで育てていただきました。感謝致します。

ふり返ってみれば、思い出すのは楽しいことばかり、つらかった事もあったと思うのだが、今になってみるとそれが楽しかった。

平和島ユースセンターでの二泊三日の錬成会。年に二回か、時には三回と行われた。一泊二日の人も、日帰りの人もいた。二十年以上続けられた。会場の都合等で条件的に無理がでて来て、会場を変えざるをえなくなった。書に対しては妥協のない師は厳しかった。読売三百枚、日展五百枚と言われ、とにかく書いた。言われただけの事はできなかったが、これでもかと思いながら書き込む作品。それでも師から「良し」の声はない。時間切れ、これが作品仕上げのタイミングだ。ギリギリまで書く。満足のいく作品はないが、やりきった感はあった。この思いは私だけではないだろう。

書においては、佐渡先生の指導を根本とし師の書風を残しつつ、一方では時代の流れや感覚に即して、斬新な発想で柔軟に変化させてい

く。これは根本に佐渡先生の指導があってこそできることです。自己流にならない為にも心していきたいと思います。

楽しい思い出と御指導を有難うございました。どうぞ安らかにお休み下さい。

合　掌

道　標

燎原社　西　岡　紅　舟

「おはようございます」　水撒きをされたお庭から挨拶をすると「(鍵)　開いているよ！」と二月に急逝された佐渡先生の声…「はい」と急ぎ二階の稽古場への階段を上って行った事が昨日のように懐かしく思い出すのは私一人でないことでしょう。

この度、改めて書の心巻頭言集「みみずのたわごと」(1)(2)の頁を捲ると先生が心血を注がれた珠玉の文章の数々にふれ、毎月の巻頭言が楽しみだったファンが多数いらっしゃったのも肯けます。勿論、私も大ファン！

私と佐渡先生の出逢いは、関西時代に先生の師故木村知石先生の同門の故藤本士啓に手習いを。帰京後「静謐で気品ある書」に魅せられてご挨拶伺った直後、大病で十年のブランク…現在も先生の書を拝見しては嘆息の日々です。

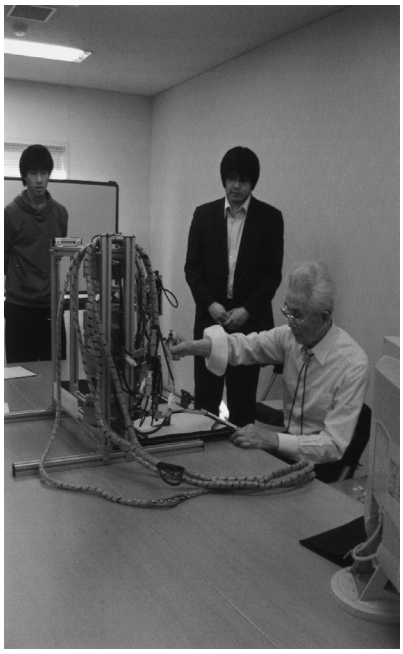
私達は大らかで気さくな千代子奥様が大好きでした。稽古、会議後はいつも労い、励ましの言葉を頂きました。そのお心遣いがどんなに心強く嬉しかったか。

その奥様が悲しいかな今日（十月二十二日）壽峰先生のいらっしゃる彼岸に旅立たれました。燎原社にとって、一年に「父母」を亡くした皆の悲しみは計り知れませんが、佐渡先生は今迄に各々、一人〳〵に書に対する「思い出」と書と向き合う「道標」の宝物を残していって下さいました。

先生『ありがとうございました』

十月二十二日

平成22年　第52回太玄会書展祝賀会にて



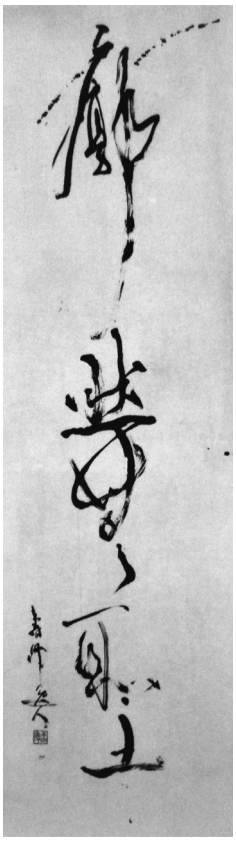
平成25年7月
慶応大学書道ロボット研究室にて

平成23年　第47回連盟展会場作品と

平成26年　第35回同人展集合写真

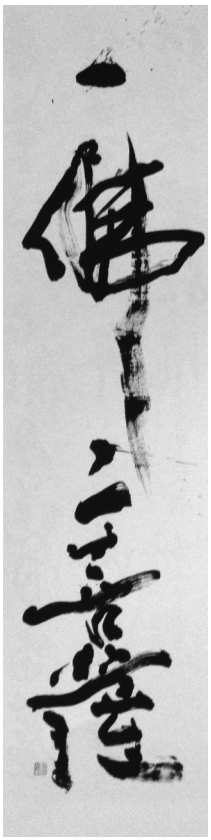
平成26年　北とぴあ新年会オープニング

平成24年
第53回太玄会書展



平成22年
第51回太玄会書展

平成21年
第50回記念太玄会書展



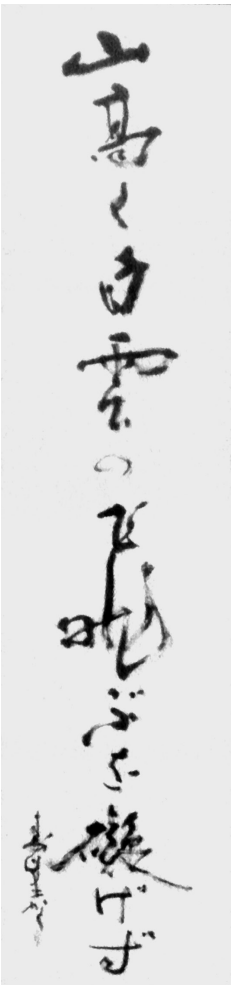
平成19年
第48回太玄会書展

平成26年
第50回太玄会役員書展

平成24年
第48回太玄会役員書展

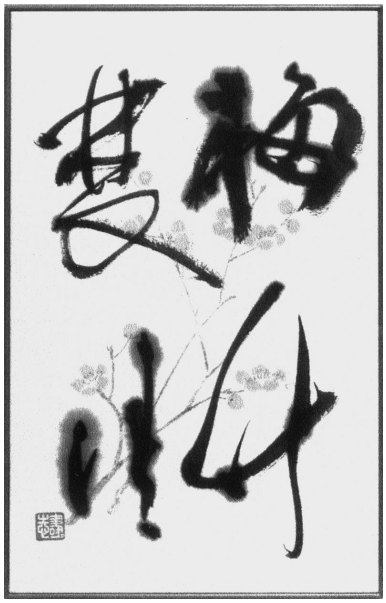
平成23年
第47回太玄会役員書展

平成26年　第50回記念現代書道教育連盟展



第33回読売展出品

平成21年３月　北とぴあ個展



昭和58年　現代書道教育連盟展

特集

太玄会を振り返って

書法研究青龍会　菴澤幸楓

太玄会との出会いは、40年以上前になります。書とは少し離れますが、当時を振り返り、感じた事・思い出などを書かせていただきます。

書道を始めた当時、太玄会書展に学生部がございまして、小学生になると年に一度、上野の東京都美術館に飾られました。すると、両親が大変喜んでくれるのが嬉しくて、当時の師匠である内山照雪師匠から、言われるがまま書いておりました。

暗く、厳かな会場での表彰式。名前が呼ばれるのを緊張しつつ待ち、壇上に上がる頃には、カチカチになっておりました。壇上に上がると心臓が口から出そうなのに加え、恐そうな先生が沢山並んでいらして、余計に緊張してまいりまして、師匠の姿を探したものでした。

上の賞に成る程、プレゼンターの先生が恐そうになり、中でも一番恐そうに見えた先生が、照雪師匠亡き後に、教えを頂く事になる、相澤龍雪師匠でした。後に相澤師匠にご指導いただくようになり、恐そうに見えただけで、とても優しく、面倒見のよい師匠なのが解ったのですが、当時恐そうに見えたことは、亡くなるまで言えませんでした。

学年が上がり、一つでも上の賞が欲しくなりまして、友人達が辞めてゆく中、出品し続けました。中学生になると、険の恐そうな相澤師匠から表彰状を頂くようになりました。

怖くて、「来年こそは、その隣の優しそうなお爺ちゃん先生から頂けるように頑張ろう」と、思ったものでしたが、そのお爺ちゃん先生こそ、阿部鉄蕉師匠で、気が付けば錬成会場で教えを頂けるようになり、壇上より緊張したものでした。

思い出は沢山ございますが、一番の思い出は、学生部から一般部に出品が変わった時の嬉しさです。それは、今回大賞を頂いたのと同じ位嬉しかったのを覚えております。今にして思えば、おそらく両親のほうが嬉しかったのではないかと思います。学生部初出品の時、記念に赤と黒の筆巻きを買ってくれたのですが、この時も大人向きの筆巻きを買ってくれたのでした。

現在、学生部の時に壇上から表彰式を見守っていて下さった先生方を少し近くから拝見出来るようになり、当時の先生方の年齢にも近づきましたが、書家としての自分の未熟さに呆れるばかりです。

年齢以外何も近づいておりませんが、一つ引き継ぎたいものがございます。それは太玄会で育てて頂いた中で、一つ自分で決めた事でございます。子供の時、壇上の和服の女性の先生方が綺麗で、いつものお母さん師匠とは違って書道家に見えた内山照雪師匠や、凛として格好よい加藤紅花師匠の着付けが、現在着物に魅かれるきっかけになりました。そして、いつか自分があそこに座れるような時が来たら、生徒を持つ時が来たら、「必ず展覧会では和服でいよう」「あの先生方の華やかさを真似しよう」と、決めました。素敵にはなれませんし、格好よくもないのですが、私を育ててくださった太玄会の先生方が、日本文化を大切にし、素敵な和服で会場を盛り上げ、品格を持ってお祝いして下さった姿勢と気持ちを引き継ぐことが私に出来るたった一つ

の形だと思うのです。
今、まだ小さな私の弟子達ですが、いずれ太玄会で活躍する日が来る時に、一つでも目標にしてもらえるように、何より、少しでも太玄会に貢献できるように、精進してまいります。
私を育てて下さいました、全ての師匠に心より感謝いたします。ありがとうございました。

太玄大賞を受賞して
―恩師への思い―

真仙会　新井清玉

拙作を太玄大賞にお選び下さいました太玄会々長の笠原聖雲先生はじめ選考委員の先生方に心より厚く御礼申し上げます。明確なビジョンも持たずその場その場で力を注ぐだけの生活でございましたので、このような賞を頂戴いたし申し訳なさで一杯でございます。
思いおこせば、今は亡き初代真仙会々長の小出聖水先生の御存命中にこの太玄展への出品をすすめられました。あれから数えきれないほどの年月が過ぎ去りました。そして丁度今から10年前に太玄賞を頂戴し、嬉しさと感謝で一杯であったことを思い出します。それが最高の賞と思っておりましたので、このたびの太玄大賞は本当にビックリでございました。この上ない最高の喜びと感謝を味わわせていただきました。小出聖水先生は常々〝書は人なり、心技一体、格調の高い書を〟と申して居られました。紙に向かう時はいつもこのお言葉を心に置き過ごしてまいりました。このお言葉はどんなに時代が変わっても書に携わる誰もが常に心にとめておきたい言葉と思います。この度の受賞に際して改めて自らの書生活を見直し、より一層精進してまいりたいと存じます。ありがとうございました。

古典への思い
―臨書から学ぶ―

書星会　石井玉翠

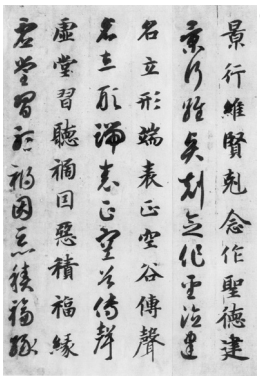
私は、書星会所属、唱和会で福田丞洲先生のご指導を受けております。娘達が生まれてから福田先生と出会い、書星会（理事長　故浅見錦龍先生、現宮負丁香先生）に競書出品しながらここまで続けて来ました。
書作品については、福田先生はもちろん、書星の先生方や太玄の先生方からも作品解説・席上揮毫等で創作のヒントやご指導を頂いています。
唱和会では、書の基本は「古来より臨書による以外に方法はなし」との考えにより、毎年臨書作品の社中展を開催しており、平成二十九年三月には第40回記念展を迎えます。
私の唱和会展初出品は、第８回展で、智永「真草千字文」①の楷書でした。

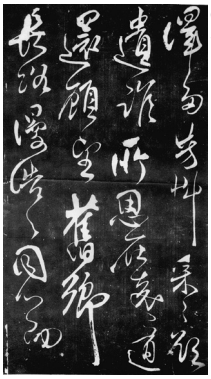
第15回唱和会展は、傅山「養育堂帖古詩十九首より」[2]でした。私はこの頃、動きのない作品しか書けませんでしたが、傅山の「跳龍」という躍動と「虎臥」という静止が混在している作品に感動を覚え、大変あこがれていました。

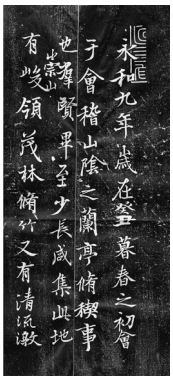
平成6年4月に、唱和会の春の江南の旅に参加しました。書の歴史を肌で感じ、私の書は始まったばかりだと痛感しました。

第25回唱和会展では、王羲之の張金界奴本「蘭亭序」[3]全文を臨書しました。記憶は曖昧ですがこの頃に王羲之に関する展覧会が幾つかの美術館で開催されたと思います。私はそれを見て、あらためて王羲之を勉強しなおしたいと考えていました。

その頃から、東京国立博物館、書道博物館、同館の共同企画展にはよく足を運んでいますが、東京国立博物館の東洋館に福田先生とご一緒した時に、趙之謙の書と絵画の展示がありました。本当に凄い、体の奥から震える感動を覚えました。


①智永「真草千字文」


②傅山「養育堂帖古詩十九首」


③王羲之の張金界奴本「蘭亭序」

④趙之謙

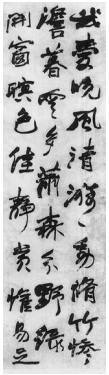
その後、唱和会で「双鉤塡墨」「籠字」の勉強会があり、趙之謙の楷書[4]に取り組みました。

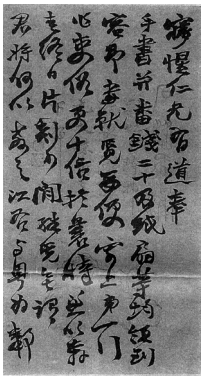
趙之謙の書法は「逆入平出」であり、作品の中に「気満」の理想を実現するための方法だと言われています。中国旅行で購入した趙之謙行書「呉鎮詩」[5]を学んだこともあり、第30回唱和会展は、趙之謙「尺牘」[6]でした。

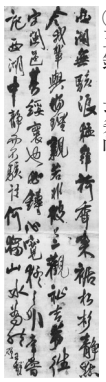
尺牘は、一文字の中に求心性と遠心性を兼ね備えて、空間の取り方がうまいといわれていますが、その頃の自作は尺牘から集字しただけの作品で、趙之謙の「気満」の書とは、かけ離れたものでした。

その後、謙慎書道会、太玄会等で、中国明清書画展が多く開催され、王鐸の作品に引きつけられました。

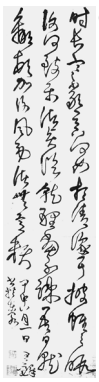
王鐸の長条幅[7][8]は、一見、自由奔放な印象がありながら、粗密を意識したバランス感覚を保っていると言われています。王鐸の臨書[9]作品は表面的な形骸の模倣ではなく、単体を連綿に、原帖を契機として独自の創意を加えていると言われています。その結果「雄健野人」王鐸らしい情趣豊かで気勢の激しい書を生み出していると言われている


⑤趙之謙行書「呉鎮詩」


⑥趙之謙「尺牘」


⑦王鐸　長条幅

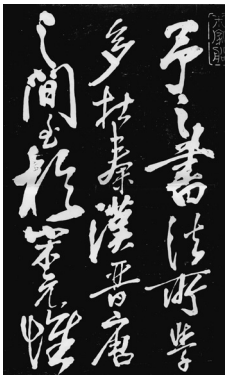
⑧王鐸　長条幅


⑨王鐸の臨書

のです。

王鐸は書籍、法帖等多くあり、「黄山谷王鐸帖」⑩⑪に魅せられ、第38回唱和会展に全臨しました。

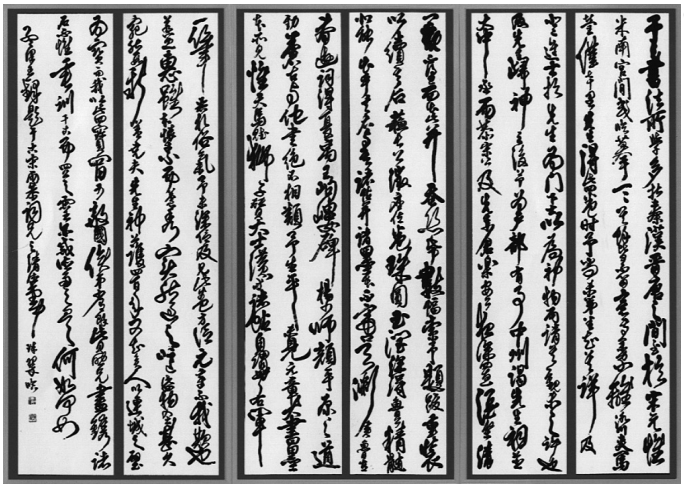
今まで唱和会展では、臨書作品の発表であり、これを自作にどの様に取り入れて行くのかが大きな課題でした。そして、今後も書道を続ける限り追い続けるべき課題でしょう。



④王鐸「黄山谷王鐸帖」

福田先生は、技巧的で「うまい書」と、何枚も書いているうちに書けた「率意の書」があるとおっしゃいます。私は、それを深く心に受け止め、精進してゆきたいと思います。

書道との出会いによって、今までの充実した時間を持てたこと、また今後の人生でずっと続けられる書道に出会えたことに感謝しています。



④王鐸「黄山谷王鐸帖」臨

古典への思い

第57回太玄大賞受賞　書人社　大窪昇鶴

昭和55年秋、中国旅行から帰国しすぐに梅原清山先生の門をたたきました。その頃、隷書に興味を持ち始め、どのように書けば良いのか思いあぐねていた頃でした。友人が「梅原先生はこうやって書き出すのよ」と、隷書の起筆の複雑な筆遣いを見せてくれました。〝逆入平出〟は単に筆先をまるめ込んで引き出すだけではないのだと目を見張りました。

その後日展に挑戦するにあたり、李白の絶句一首を一葉に十首帖仕立てにして書いて持参したところ、先生より「細字は一字一字がまるで宝石のように輝いていなければいけないよ」とのアドバイスを戴き、今でも心して一字一字に思いを寄せて書いております。

今回、荒井湧山先生より太玄会報誌への原稿依頼を戴きました。書の歴史はまさに中国の歴史そのものです。複雑な中国の歴史ですが、隷書が確立するまでの書体の変遷を時系列で辿り、隷書の本質に少しでも迫ることが出来れば今後の書作のヒントになると思い、この機会に青山杉雨先生の御著書を中心に書架から取り出して拝読させて戴きました。

殷（B.C.1,800～B.C.1,100）の甲骨文から始まる文字―すなわち書の歴史は周（西周B.C.1,100～B.C.770）を経て春秋・戦国時代（B.C.770～B.C.22）までの青銅器の銘文―金文の変化を青山杉雨先生は御著書「書の実相」（二玄社刊・17頁）の中で次のように述べられておられます。

「青銅器銘文を書としての表現で通観してみると、それはその後の書道が書体こそちがうが、それぞれの時代に辿る変相を、まるで凝縮したような状態をハッキリ現していて、興味をそそるものが少なくありません。即ち初期は新鮮、中期は充実と平明、晩期は頽廃と…まさに書は生きもののように常に動いていることが解ります」何と含蓄のある示唆に富んだお言葉でしょうか。

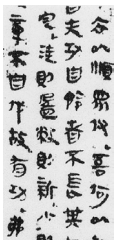
さらに秦（B.C.221～B.C.206）の始皇帝が天下を統一すると共に字体も統一し、制定されたのが小篆です。

隷書は篆書の字形が簡略化されたものです。[1]篆書の隷化は、文字の使用が急速かつ広範に用いられた戦国時代に萌芽し、秦から前漢（B.C.206～A.D.206）にかけて[2]変化発展したと思われます。新（A.D.8～A.D.23）の時代には見事な波磔で飾られた新しい風格をもった新書体―すなわち[3][4]八分隷が完成します。

特に後漢（A.D.25～A.D.220）に入ると立碑の風潮がにわかに盛んになり、必然的に書の芸術的な発展を促しました。

その後清代に入り金石学が盛んになると、これらの古典が十分に研究されその確乎たる基盤の上に不朽の[5][6]名作を残した書家を多く輩出したことは皆様すでにご周知の通りです。

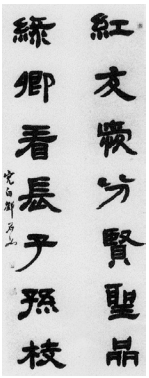
20世紀初め、ヘディン・スタイン・大谷探検隊らによって樓蘭・敦煌などの西域で木竹簡・帛書等が発掘されたのが戦国時代から漢代にかけての丁度その時代そのものです。また近年でも大量に発掘され、秦篆からみごとな波磔をもった漢隷―八分書まで変化に富んだ文字群を、それも墨書で見ることができることは書を志すものとして幸運なことです。これら素晴しい古典の数々を学び文字に対する見識を養い、これからの書作の礎としたいと念願しています。


①篆書の隷化

②王鐸「黄山谷王鐸帖」

③王鐸「黄山谷王鐸帖」

④王鐸「黄山谷王鐸帖」


⑤王鐸「黄山谷王鐸帖」

⑥王鐸「黄山谷王鐸帖」

「師を慕ぶ」
―太玄大賞の報告―

第57回太玄大賞受賞
燎原社　堀越壽嵓

平成28年1月24日、師匠の佐渡壽峰先生が入院する生協病院へお見舞いにうかがいました。ここ何カ月、身体のいたるところが調子が悪くなり、入退院の繰り返しをされておられました。

この日は太玄展の授賞式の日で、この式に出席する前に、ぜひとも先生に今回の私の太玄大賞の受賞を直接報告しようと立ち寄りました。先生はベッドから上半身を起き上がり太玄展最高位の受賞をにこやかな顔で喜んでくれました。燎原社のような小さな団体に光を当てていただいたことを本当にうれしく思っているようでした。

「小会派ではあるが、少しずつあせらずじっくり進んでいってもらいたい」と話されました。きっと春には元気なお姿で燎原社の稽古の場にお顔を出されるだろうと想像しておりました。まさかこれが最後の言葉になるとは思ってもおりませんでした。

先生は、書道の魅力と技法を惜しみなく教えてくださり、また私が今まで続けてこられたのも先生の温かいお言葉が支えになっていたことは間違いありません。

練　成　会

先生がお元気だった頃、2泊3日の練成会を大田区の平和島で年に何度となく行っていました。

先生は、ほとんど休む間もなく指導にあたりますので、弟子もうかうかと夜であっても寝ていることはできません。先生は、作品選別だけでなく、実際に目の前で多くの作品を書き上げます。その時の筆さばきのスピード感やリズム感の見事さとその妙技に毎回心が引き込まれました。ほとんど夜を徹して書いている様子を施設の管理人は驚き、廊下にできる紙の山はさぞかし異様な風景に映ったことと思います。書いて、書いて、書きまくる。先生の書道に対する終始変わらぬ姿勢がまさにこの練成会でした。

太玄会への合流

先生は、会のあり方や弟子たちの将来を考え太玄会への合流を平成16年、決断されました。

自己研鑽のための挑戦の場である読売書法展や地方の展覧会の出品数が幾分少なくなる状況の中で、「井の中に」こもろうとする様態が次第に強くなっている様に思え、これを打破するには外部との風気が必要と判断されました。太玄会という会の中での交流で、広く親睦関係や、情報等や広い書表現を吸収しながら切磋が醸し出されるためにも新しい世界に挑戦することが望ましいと考えたからです。現在は、おかげ様に多くの社中の皆さんからご支援を賜っているところです。

結　び　に

今、作品づくりをしながら何度となく迷いを繰り返しています。この文字の点の位置はここで適当か、この空間はつくるべきか、筆勢は、墨の調子は、紙の具合は…。師匠がいないことがこんなに大変なことかと身にしみて感じております。

一人で考え決めなくてはいけない。浅学非才、いかに立ち向かうか。燎原社の皆も悩みながら前を向いて進んでいます。どうか先生、雲の上から我々の書作の姿を見守ってください。

編集後記

第58回太玄会書展が、先日無事に盛況の内に閉幕した。今回特出すべきは第1回学生選抜展を開催したことがあげられる。会場には多くの家族連れが来場し、作品の前で記念写真を撮影する微笑ましい光景を沢山見る機会を得た。小中高生が真摯な態度で向き合う作品を見ていると、書を始めたばかりの純粋な時代を思い出して元気をもらうことができた。また、特別講演では日展会員の有岡郊崖先生を講師に迎え、「書のモダニズム」と題して、深い見識から捉えた書の在り方について講話を頂いた。私たちがこれからどのように書と向き合っていくべきか、当日拝聴した皆様は自分の書について深く考えさせられる貴重な時間だったのではないだろうか。

この数年間、太玄会は様々な場面でチャレンジをしてきている。席上揮毫、作品解説、特別講演、そして役員による大作作品の制作など、これまでに培ってきた財産をアウトプットすることは、外部へのアピールだけでなく会員相互が書を学び合う姿勢を高めることにも繋がっている。また、有識者からの深い見識をインプットすることは会全体の自覚を深めることへ繋がり、これら発信と吸収を積み上げることがこれからの発展の礎になると確信している。

太玄会がさらに発展するためにも、私たち会員が自分の書をどのように新しい世界へ導き出せるか、一人ひとりの取り組みこそが大切であることを再確認したいものである。

未来の太玄会が大きく発展する兆しを今回の学生選抜展に見ることができた。数年後、半紙作品から大作へ挑戦する子どもたちを多く育てたいものである。

平成29年3月

広報部長　荒井湧山

平成二十九年三月発行
太玄会会報　第73号
発行者　太玄会
編集者　太玄会事務局広報部
制作　㈱風雅プランニング